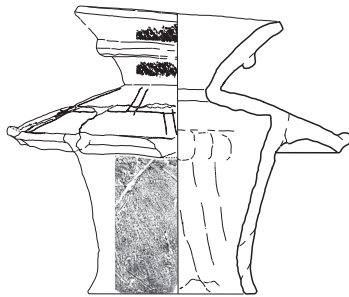


辻古墳群

坂ノ市地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

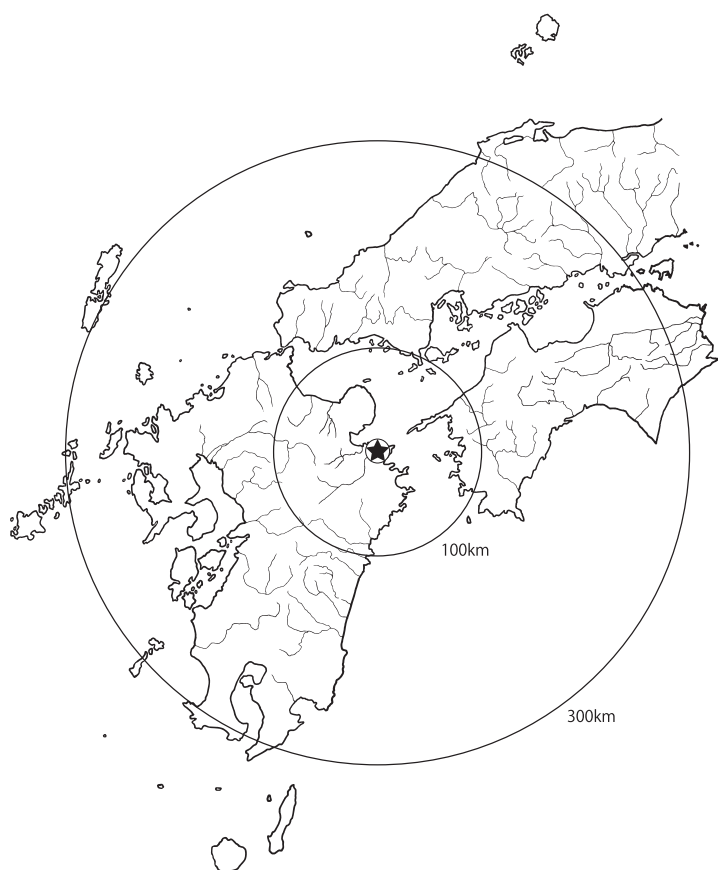


2004

大分市教育委員会

辻古墳群

坂ノ市地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2004

大分市教育委員会

序文

大分市域東部の大在・坂ノ市地区は、旧海部郡に属し、古代には海部郡衙もおかれていました。さらに遡れば、国指定史跡亀塚古墳をはじめとする古墳が数多く分布しており、古墳時代以来、海部の中心地域となってきたことが知られています。

本書において報告する辻古墳群は、亀塚古墳を望む丘陵上に所在し、坂ノ市土地区画整理事業に伴う発掘調査により新たに発見されたものです。1号墳は墳丘が削平され、周溝の一部のみが残存していましたが、調査結果と地籍図などの検討により、全長およそ50mの前方後円墳であったことが推定され、亀塚古墳に後続する海部の首長墓の一つであったことが明らかになりました。また、周溝からは多数の蓋形埴輪や家形埴輪、円筒埴輪が出土し、海部を代表する首長墓にふさわしく墳丘を飾っていたことが想像できます。

本書が、歴史の資料として広く活用されれば望外の喜びと存じます。

最後になりましたが、ご指導いただきました諸先生方、ご協力いただいた諸機関各位に対しまして御礼申し上げます。

平成16年3月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政博

例言・凡例

- 1 本書は、大分市教育委員会が坂ノ市地区土地区画整理事業に伴って平成 12 年度に実施した辻古墳群発掘調査の正式報告書である。
- 2 空中写真撮影ならびに空中写真測量については、株式会社写測エンジニアリングに委託した。
- 3 本書に使用した遺構実測図、遺構写真は調査を担当した高畠豊、姫野公德及び讃岐和夫が作成・撮影したものである。
- 4 調査の際には平面直角座標 2 系（旧日本測地系）の座標値を実測・測量の基準として使用した。
- 5 本書作成に至るまでの遺物整理作業（遺物の注記・復元・実測）並びに遺物・遺構図版作成作業（トレース・版組等）は担当職員である高畠豊の他、井口あけみ、梅田昭宏 上原翔平（大分市教育委員会文化財課嘱託）ならびに次に記す大分市・大分市教育委員会臨時職員の多大な協力の下に実施されたものである。（順不同）小野千恵美、松場泉、伊東みほ、川筋智栄子、木村藍子、小野啓子、工藤絵美、江藤梓、副直美、作吉美知子、白橋福子、中山麻理子、清本類、近藤智史、植田高夫、姫野尚之、橋本千代美、今村信子
また、一部の埴輪については、中西武尚が実測した。
- 6 埴輪の整理作業にあたっては、大分県教育委員会田中裕介氏に有益な助言をいただいた。
- 7 出土遺物の写真撮影は高畠が行ったほか、(有)鎮西カラー、(有)フォトワーク大分に委託して撮影した。
- 9 本書で使用した方位は全て座標北（G.N.）である。
- 10 出土遺物および調査の記録・資料は大分市教育委員会文化財資料室に保管している。
- 11 本書の執筆・編集は高畠が行った。
- 12 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SD：溝・周溝、SE：井戸跡、SH：掘立柱建物、SF：石組遺構を表す。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と調査経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査区の位置と環境	2
第2章 試掘調査	7
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 辻1号墳	9
(1) 周溝(SD001)	9
(2) 周溝(SD001) 上層出土遺物	19
(3) 周溝(SD001) 出土遺物	20
①須恵器・土師器	20
②埴輪	21
a. 蓋形埴輪	21
b. 家形埴輪	36
c. 靴形埴輪?	40
d. 円筒埴輪	41
e. 朝顔形埴輪	51
第3節 辻2号墳	53
(1) 遺構	53
(2) 2号墳出土遺物	54
第4節 近世の遺構と遺物	56
(1) ピット群	56
(2) 石組み遺構	56
(3) 溝状遺構	56
(4) 土坑	60
(5) 井戸跡	61
第5節 その他	62
第4章 考察・まとめ	63
第1節 辻1号墳墳丘の復元的検討	63
第2節 辻1号墳出土の埴輪について	68
第3節 辻1号墳の主体部について	69
第4節 辻1号墳の位置づけ	72
第5節 おわりに	74
史料	76
出土遺物観察表	78
報告書抄録	84
写真図版	85

挿図目次

第 1 章

第 1 図	辻古墳群の位置と周辺遺跡分布図（1/25000）	3
第 2 図	坂ノ市土地区画整理事業地区と調査箇所（1/20000）	6
第 3 図	調査地点位置図（1/2500）	6

第 2 章

第 4 図	辻古墳群試掘調査区配置図（1/600）	7
第 5 図	第 12T 周溝深堀状況（北から）	7
第 6 図	石棺調査状況（北西から）	7
第 7 図	調査区南東端石棺材の集積（北から）	7
第 8 図	試掘調査時出土遺物（年報 8 掲載：1/6）	8
第 9 図	扶状耳飾実測図（2/3）	8

第 3 章

第 10 図	辻古墳群検出遺構全体図（1/350）	10
第 11 図	1 号墳周辺検出遺構全体図（1/300）	11
第 12 図	1 号墳調査区設定図（1/250）	12
第 13 図	1 号墳葺石出土状況・土層断面位置図（1/250）	13
第 14 図	SD001 土層断面図（1/50）	14
第 15 図	1 号墳周溝内埴輪出土状況図 1（1/250）	15
第 16 図	1 号墳周溝内埴輪出土状況図 2（1/20）	16
第 17 図	1 号墳周溝内埴輪出土状況図 3（1/20）	17
第 18 図	葺石の大きさ分布図	18
第 19 図	葺石の重さヒストグラム	18
第 20 図	葺石の石材別構成	18
第 21 図	1 号墳周溝上層出土遺物（1/3）	19
第 22 図	1 号墳周溝出土須恵器・土師器（1/3）	20
第 23 図	蓋形埴輪 1（1/4）	22
第 24 図	蓋形埴輪 2（1/4）	23
第 25 図	蓋形埴輪 3（1/4）	24
第 26 図	蓋形埴輪 4（1/4）	25
第 27 図	蓋形埴輪 5（1/4）	26
第 28 図	蓋形埴輪 6（1/4）	27
第 29 図	蓋形埴輪 7（1/4）	28
第 30 図	蓋形埴輪 8（1/4）	29
第 31 図	蓋形埴輪・立飾り 1（1/4）	30
第 32 図	蓋形埴輪・立飾り 2（1/4）	31
第 33 図	蓋形埴輪・立飾り 3（1/4）	32
第 34 図	蓋形埴輪・立飾り 4（1/4）	33
第 35 図	蓋形埴輪・立飾り復元図（1/8）	36
第 36 図	家形埴輪 1（1/4）	37

第 37 図	家形埴輪 2 (1/4)	38
第 38 図	家形埴輪 3 (1/4)	39
第 39 図	家形埴輪復元図 (1/10)	39
第 40 図	靴形埴輪? (1/4)	40
第 41 図	円筒埴輪 1 (1/4)	42
第 42 図	円筒埴輪 2 (1/4)	43
第 43 図	円筒埴輪 3 (1/4)	44
第 44 図	円筒埴輪 4 (1/4)	45
第 45 図	円筒埴輪 5 (1/4)	46
第 46 図	円筒埴輪 6 (1/4)	47
第 47 図	円筒埴輪 7 (1/4)	48
第 48 図	円筒埴輪 8 (1/4)	49
第 49 図	円筒埴輪 9 (1/4)	50
第 50 図	朝顔形埴輪 1 (1/4)	51
第 51 図	朝顔形埴輪 2 (1/4)	52
第 52 図	辻 2 号墳平面・断面図 (1/60)	53
第 53 図	2 号墳主体部平面・断面図 (1/30)	54
第 54 図	辻 2 号墳出土遺物 (1/3)	55
第 55 図	近世遺構分布図 (1/300)	57
第 56 図	SF047・SD048 実測図 (1/60)	58
第 57 図	SF047 出土遺物 (1/3)	58
第 58 図	SD042 出土遺物 (1/3)	59
第 59 図	SD002 出土遺物 (1/2、1/3)	60
第 60 図	SK059 出土遺物 (1/3)	61
第 61 図	SE052 出土遺物 (1/3)	61
第 62 図	SE052 実測図 (1/40)	61
第 63 図	旧石器実測図 (2/3)	62
第 64 図	辻古墳群周辺旧都市計画図 (1/4000)	63
第 65 図	辻古墳群周辺明治時代地籍図 (1/3000)	64
第 66 図	辻 1 号墳周辺地割図 (1/1000)	65
第 67 図	1962 年国土地理院撮影空中写真	66
第 68 図	1948 年米軍撮影空中写真	66
第 69 図	1972 年国土地理院撮影空中写真 (原図カラー)	66
第 70 図	辻 1 号墳範囲復元図 (1/1000)	67
第 71 図	蓋形埴輪比較図 (1/20)	68
第 72 図	王ノ瀬天満社石棺 (1/60)	69
第 73 図	王ノ瀬石棺移転想定図 (1/3000)	72

表目次

第 1 表	王ノ瀬石棺についての伝承一覧	70
-------	----------------	----

写真図版目次

写真図版 1

辻 1 号墳葺石出土時遠景（南から）

辻 1 号墳葺石出土時遠景空中写真（北東から）

写真図版 2

辻 1 号墳葺石出土時全景（南から）

辻 1 号墳完掘時全景（南から）

写真図版 3

辻 1 号墳完掘時遠景空中写真（北東から）

辻 1 号墳完掘時遠景空中写真（南西から）

辻 1 号墳葺石出土時遠景空中写真（上が北）

辻 1 号墳完掘時遠景空中写真（上が北）

写真図版 4

試掘調査状況

試掘 5T 西から 石棺材集積地点を望む

試掘 10T 深堀状況（東から）

試掘 10T 周溝深堀部分（南から）

試掘 12T 検出直後の状況（南から）

試掘 12T 周溝深堀部分（西から）

試掘前辻 2 号墳石棺露出状況（北から）

辻 2 号墳石棺完掘状況（北から）

写真図版 5

辻 1 号墳周溝 B 区北壁（北西から）

辻 1 号墳周溝 D 区南壁（北から）

辻 1 号墳周溝 G 区北壁（南から）

辻 1 号墳周溝 Q 区東トレ（東から）

辻 1 号墳周溝 V 区南壁（北から）

辻 1 号墳周溝 A 区礫上面須恵器壺出土状況

辻 1 号墳周溝 O, N 区土師器出土状況

辻 1 号墳 K 区礫上面染付出土状況

写真図版 6

1 号墳周溝内埴輪出土状況（西から）

1 号墳周溝 B 区立飾り出土状況

1 号墳周溝 A 区蓋形埴輪出土状況

1 号墳周溝 F 区朝顔形埴輪出土状況

1 号墳周溝 M 区蓋形埴輪出土状況（南から）

1 号墳周溝 L 区蓋形埴輪検出状況

1 号墳周溝 L 区蓋形埴輪出土状況（西から）

写真図版 7

1 号墳周溝 J, K 区蓋形埴輪出土状況（西から）

1 号墳周溝 J, K 区蓋形埴輪出土状況（南から）

1 号墳周溝 N 区蓋形埴輪出土状況（東から）

1 号墳周溝 P 区蓋形埴輪出土状況（南から）

1 号墳周溝 Q 区蓋形埴輪出土状況（東から）

1 号墳周溝 Q 区須恵器出土状況近景

1 号墳周溝 R 区蓋形埴輪出土状況（南西から）

1 号墳周溝 T 区埴輪出土状況（西から）

写真図版 8

1 号墳周溝 T 区立飾り出土状況

1 号墳周溝 V 区立飾り出土状況

2 号墳周溝検出状況（西から）

2 号墳周溝遺物出土状況（西から）

2 号墳周溝遺物出土状況近景（西から）

2 号墳周溝完掘状況（西から）

近世石組み SF047 出土状況（北から）

調査状況 2000 年 8 月 9 日（東から）

写真図版 8

蓋形埴輪 第 24 図 3

蓋形埴輪 第 24 図 3 受け部

蓋形埴輪 第 24 図 3 受け部内面

蓋形埴輪 第 23 図 1

蓋形埴輪 第 23 図 2

写真図版 9

蓋形埴輪 第 24 図 7

蓋形埴輪 第 24 図 4・6・第 25 図 10

蓋形埴輪 第 25 図 11

蓋形埴輪 第 25 図 11 表面の調整

蓋形埴輪 第 25 図 12・13

蓋形埴輪 第 26 図 14

蓋形埴輪 第 26 図 15

蓋形埴輪 第 26 図 16

写真図版 10

蓋形埴輪 第 26 図 17

蓋形埴輪 第 26 図 18

蓋形埴輪 第 27 図 19

蓋形埴輪 第 27 図 20

蓋形埴輪 第 27 図 21

蓋形埴輪 第 27 図 22

蓋形埴輪 第 27 図 23

蓋形埴輪 第 28 図 24

写真図版 12

蓋形埴輪 第 28 図 25

蓋形埴輪 第 28 図 26

蓋形埴輪 第 28 図 27

蓋形埴輪 第 29 図 28

蓋形埴輪 第 29 図 29

蓋形埴輪 第 29 図 30

蓋形埴輪 第 29 図 31

蓋形埴輪 第 29 図 32

写真図版 13

蓋形埴輪 第 30 図 33

蓋形埴輪 第 30 図 34

蓋形埴輪 第 30 図 35

蓋形埴輪 第 30 図 36

蓋形埴輪 第 30 図 37

蓋形埴輪 第 30 図 38

蓋形埴輪立飾り 第 31 図 1

蓋形埴輪立飾り 第 31 図 2

写真図版 14

蓋形埴輪立飾り 第 32 図 3

蓋形埴輪立飾り 第 32 図 4

蓋形埴輪立飾り 第 33 図 12・13

蓋形埴輪立飾り

第 33 図 10・11、第 34 図 18

家形埴輪 第 36 図 1 その 1

家形埴輪 第 36 図 1 その 2

家形埴輪 第 37 図 9 正面

家形埴輪 第 37 図 9 側面

写真図版 15

家形埴輪 第 37 図 13・17・18

家形埴輪 第 37 図 12 正面・側面

家形埴輪 第 38 図 21・22

家形埴輪 第 38 図 23～31

靫形埴輪？第 40 図

朝顔形埴輪 第 51 図 41

円筒埴輪 第 41 図 1～11

円筒埴輪 第 42 図 21～30

写真図版 16

円筒埴輪 第 42 図 31～37

円筒埴輪 第 43 図 38・40・41

円筒埴輪 第 45 図 80～83

円筒埴輪底部調整 第 45 図 91

円筒埴輪底部調整 第 46 図 98

円筒埴輪 第 47 図 132

須恵器器台 第 22 図 1～3

試掘調査出土挾状耳飾り 第 9 図

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査経過

坂ノ市地区は大分市東端に位置し、新産業都市二期計画により、地区の北側海岸において埋立てによる工業基地化が進められている。想定される人口増加に伴う宅地需要増加に対応するため、大分市では、都市計画道路・区画街路・公園・その他公共施設等の整備改善を行い、宅地の高度利用と市街地の造成を目的として昭和53年度より土地区画整理事業を行ってきたところである。

このうち、事業地区北西端にあたる大字里字辻は、周知の埋蔵文化財包蔵地「辻古墳」が所在する丘陵にあたっていた。この地区では宅地と街路の整備が計画されていたが、辻古墳の現状や他の遺構の所在状況が不明であったため、大分市教育委員会では、遺跡の試掘調査を平成8年8月5日～10月31日に実施した。その結果、円形に巡る古墳の周溝が確認され、埋土からは円筒埴輪や蓋形埴輪が多数出土し、前方後円墳の可能性もある大型古墳の一部であると推定された。このほか箱形石棺墓1基も検出され、当該地に複数の古墳が存在することが確認された。この結果を受け、大分市教育委員会は区画整理課と遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、事業計画の変更は困難であることから、対象地区全面を発掘調査して記録保存を行うことにした。

本調査は平成12年3月1日から9月14日まで行われ、調査面積は2370㎡である。日程の都合により、4月の1ヶ月間は調査を休止している。調査の結果、試掘調査で確認された2基の古墳に加え、近世の溝、石組み遺構、建物跡等も検出された。試掘調査の際、周溝が検出され、大型古墳と推定されていた遺構（1号墳）については、大規模な周溝が検出されたが、戦後の空中写真や旧地籍図もあわせて検討した結果、前方後円墳の可能性が高いことが判明した。また、2号墳については、新たに方形に巡る周溝が検出され、箱形石棺を主体部とする方墳であったことが推定された。

第2節 調査組織

平成12年度 発掘調査作業員			
平成8年度（試掘調査）	薬師寺 設子	青柳 八重子	村上 加代
調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘	桜井 モモエ	宮崎 千代子	池見 清子
事務局 大分市教育委員会 文化振興課	江藤 美代子	村上 サヨ子	草野 民子
課長 工藤久典	山田 ツル子	小浦 伊策	広瀬 文隆
参事 秦 政博	江藤 艶子	一宮 安男	五郡 智枝
室長 堀 和則	坂本 サダヨ	杉原 福一	松田 ひとみ
専門員 讃岐和夫（試掘調査担当）	後藤 トシ子	佐野 光重	江崎 義眷
	丸井 くに子	太田 重行	上野 美奈
平成12年度（本調査）	伊藤 美津子	益田 智子	長岡 宣子
調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘	常行 幸子	藤原 アヤメ	古層尾 元生
事務局 大分市教育委員会 文化財課	増本 文子	林 スミエ	東 秀道
課長 秦 政博	佐藤 之義	神田 ムツ子	衛藤 照子
課長補佐 帯刀修一	麻生 松子	大野 マサ子	丹生 良世
文化財係長 讃岐和夫	江藤 隼人	御手洗 幸子	佐々木 盛子
指導主事 姫野公德（調査担当）	木下 典枝	広瀬 光子	古層尾ミサヨ
技師 高畠 豊（調査担当）	笹本 太一	渡辺 ヒデ子	
	鈴木 友裕	幸 勝子	

平成13年度（遺物整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 御沓義則

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 帯刀修一

主幹 玉永光洋

文化財係

課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫

技師 高島 豊

平成14年度

調査主体 大分市教育委員会

教育長 御沓義則（～平成14年6月27日）

秦 政博（平成14年6月28日～）

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 帯刀修一

参事 玉永光洋

文化財係

課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫

技師 高島 豊

平成15年度（報告書刊行）

調査主体 大分市教育委員会

教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会文化財課

課長 帯刀修一

参事 玉永光洋

文化財係

課長補佐兼管理係長 讃岐和夫

技師 高島 豊

第3節 調査区の位置と環境

大分市東部の大在・坂ノ市地区は、大野川河口部右岸から丹生川河口部をへて佐賀関町神崎付近にかけて広がる海岸平野、海岸段丘を含む丹生の台地・丘陵、丹生川流域の平野部、そしてこれらの南西に位置する九六位山系の山岳地帯から構成されている。

このうち、海岸平野は、大野川と丹生川が運搬した砂泥が堆積して東西方向に形成された3～4列の浜堤列とその間の後背湿地から成っている。最も南側で丘陵寄りの浜堤は縄文時代前期から中期にかけて、縄文海進後の海退に伴って形成されたと推定されるが、最大規模の浜堤には古墳時代の浜遺跡が所在することから、遅くとも古墳時代前期には海側から2番目の浜堤が安定した陸地となっていたことが分かる。したがって最も海側の浜堤を除き、縄文時代前期以降、古墳時代までの間にこれらの浜堤が徐々に形成され、それらが人間の生活の舞台となっていったと推定される。海面の埋め立てや区画整理事業が実施される以前には、浜堤上は宅地・畑地ならびに松林であり、後背湿地は水田として利用される特有の景観が広く見られた。本書で報告する辻古墳群は、丹生川左岸の丘陵先端部付近に立地している。

以下、本地域に存在する遺跡を中心に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、本地域の南西に広がる丘陵上に立地する丹生遺跡が挙げられる。この遺跡ではナイフ形石器等の後期旧石器以外に多くの礫核石器が出土しており、その位置づけが問題とされてきた。当初、報告者により、前期・中期旧石器に位置づけられたが、後の報告では多くが後期旧石器に位置づけ直された⁽¹⁾。さらに最近では、大分県内の同種の石器の検討により、これらの礫核石器が縄文時代早期に位置づけられる可能性が高いとの指摘もなされるに至っており⁽²⁾、遺跡の評価の見直しが避けられないと思われる。

この他、中安遺跡第2次・第3次調査においてもナイフ形石器等の明確な後期旧石器が出土している⁽³⁾。しかしながら、本地域においては旧石器時代の文化面が良好に残っている遺跡は依然として確認されておらず、今後

の調査における課題である。

縄文時代には小亀塚古墳の北地区からは条痕文土器が出土している⁽⁴⁾が、海岸平野部の浜堤上においては縄文時代後期の土器が浜遺跡や王ノ瀬の天満社周辺で採集されており⁽⁵⁾、この時期以降に遺跡が展開し始める。晩期には、横塚遺跡において土偶が出土している⁽⁶⁾ことも注目される。晩期末～弥生時代早期初頭に位置づけられる上菅生 B 式～下黒野式期には浜・長無田遺跡においてまとまった資料が出土している⁽⁷⁾。この遺跡からは、朝鮮系の無文土器も出土しているほか、大型石錘や金山産とみられるサヌカイト石器の多数出土など、生業形態や交易の点においても注意される遺跡である。

弥生時代から古墳時代初頭にかけて墓地と祭祀に関連する多くの遺跡が知られている。とりわけ、大在浜遺跡は弥生中期後半に位置づけられる集石墓、カメ棺墓等に加え中細銅剣 4 本が出土している⁽⁸⁾。久原遺跡では、弥生中期のカメ棺墓や集石墓、石棺（小児用）を出土しており、細形銅剣 1 点の出土も知られている⁽⁹⁾。丘陵上の遺跡としては、方形と円形竪穴住居跡が検出された一木遺跡⁽¹⁰⁾が知られているが、調査件数が少なく、丘陵上の生活遺跡と浜堤上の墓地・祭祀遺跡の関連性については今後さらに解明が必要である。

古墳時代初頭には浜堤上においては浜遺跡⁽¹¹⁾の箱形石棺群が出現するが、この地域における最初の定型化した前方後円墳は、4 世紀後半に築造されたと考えられる上の坊古墳⁽¹²⁾である。この古墳は、全長 59m のいわゆる柄鏡形の墳形を呈するもので、主体部は箱形石棺で、舶載方格規矩鏡、環頭太刀、剣、鉄鏃、玉類等が出土している。この後、5 世紀初めの古墳時代中期初頭には、大分県内でも最大規模の前方後円墳である 3 段築成全長 115m の亀塚古墳⁽¹³⁾が築かれる。亀塚古墳は、箱形石棺の主体部を有し、平成 6 年度に行われた主体部の発掘調査では、大規模な盗掘が確認されたものの、鉄剣鉄刀片、鉄鏃片、鉄製短甲片等の武器・武具のほか滑石製を主体とする多数の玉類が出土し、また第 2 主体部として小型の竪穴式石室が検出された。亀塚古墳には多数の埴輪が樹立されていたことが確認されており、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、家形埴輪、靴形埴輪、蓋形埴輪が存在し、畿内から初めて定型的な埴輪祭式が導入されていたことを物語っている。また、船形埴輪も出土しており、海上活動に富む海部の地域性を如実に示すものとなっている。大在古墳⁽¹⁴⁾は、5 世紀中頃、浜堤上に築造された直径約 35m の円墳であるが、短い前方部をもつ 50m を超す前方後円墳であった可能性も窺われる古墳である。砂のみで築造された特徴的な墳丘であり、主体部は箱形石棺であったと推定される。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、家形埴輪、靴形埴輪、蓋形埴輪、さらに船形埴輪も出土しており、畿内系の埴輪工人が導入されたと評価されている。小亀塚古墳⁽¹⁵⁾は亀塚古墳の北側に隣接する全長 35m の短い前方部を有する前方後円墳である。平成 6 年度の確認調査では 2 段築成で葺石は無いこと、主体部は未発見ながら、刳拔式石棺の可能性があることが推定された。築造時期については亀塚第 2 主体よりも新しい時期に位置づけられるが、前方部の短縮された前方後円墳であり、埴輪が出土しないことから、大在古墳よりもさらに新しい 5 世紀後半～末頃に位置づけられる。王ノ瀬の石棺⁽¹⁶⁾は辻古墳群から北東側へ 120m に所在する王ノ瀬天満社境内に安置されていた石棺で、縄掛突起をもつ凝灰岩製のくり抜き式の家形石棺である。この石棺は明治頃に運び込まれたと伝えられており、小亀塚古墳か辻 1 号墳の主体部になる可能性が考えられる。このほか、亀塚古墳の北西側台地上には全長約 50m の前方後円墳とされる大蔵古墳があるが詳細な調査が行われておらず、墳形や時期については確定的な情報がない。

小亀塚古墳以降、6 世紀になると墳丘をもつ古墳は築造されなくなり、代わって丘陵斜面には多くの横穴墓群が造営される。古墳時代の集落地については公開された調査情報が少ないが、城原丘陵上の城原・里遺跡（中安遺跡⁽¹⁷⁾）では古墳時代後期の竪穴住居群が検出されており、カマドを有する住居も多く認められる。おそらく丘陵周辺斜面に展開する横穴墓群の母村の一つであろう。また一木遺跡においては後期の住居群が検出されている。このように弥生時代と同じく丘陵上に集落が形成されていることが知られるが、浜堤上の集落や、後背湿地の水田等の土地利用については依然不明である。

古代には亀塚古墳などが立地していた城原丘陵からその北側の海岸平野は豊後国海部郡佐尉郷に編成される。

城原・里遺跡¹⁸⁾では7世紀後半～8世紀初頭に整然と配置された大型掘立柱建物群が出現し、「評衙」の可能性が考えられている。同遺跡においては8世紀前半から後半にかけて、中心位置を約400m西に移動させて規格的に配置された大型掘立柱建物群が継続的に営まれていることが判明しており（中安遺跡第2次・第3次調査¹⁹⁾海部郡衙の可能性が高いと評価できる。古代律令制下においても、古墳時代に首長墓が継続的に営まれた佐尉郷が政治的な中心地として引き続き位置づけられていることを物語っている。

古代末期から中世には、佐尉郷は国衙領となり、南北朝時代以降は守護大友氏の所領化される。

近世には熊本藩領と白杵藩領となり、明治に至っている。

【註】

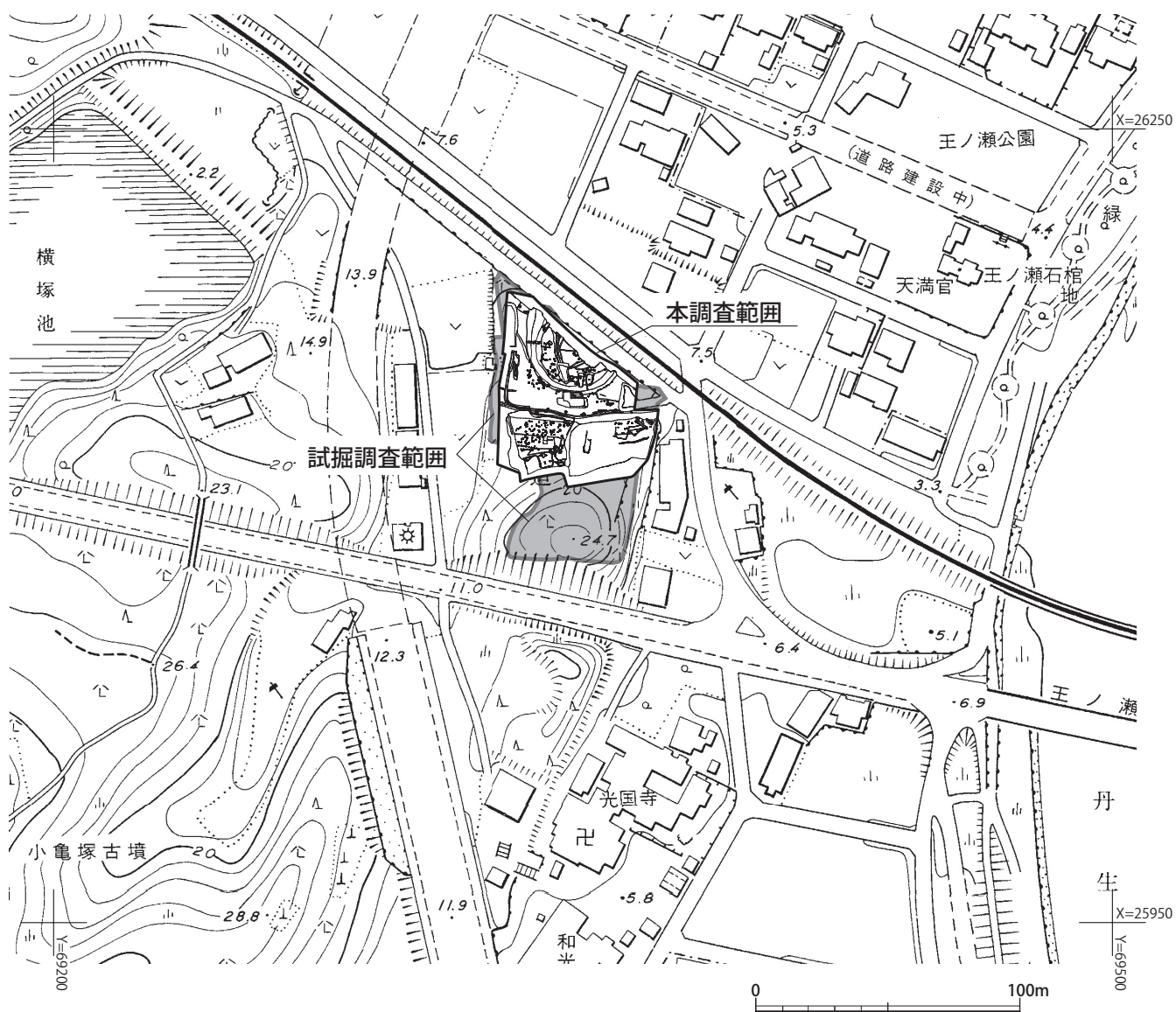
- (1) 鈴木忠司編『大分県丹生遺跡群の研究』財団法人古代学協会 1992
- (2) a 荻幸二「縄文時代早期の大分平野出土の礫器に関する一考察」『FRONTIER』Vol.3 2001
b 荻幸二「丹生遺跡長迫地点」『大分市市内遺跡確認調査概報—2001年度—』大分市教育委員会 2002
- (3) 中安遺跡第3次調査の担当者1人である宮田剛氏（大分市教育委員会囑託）からご教示いただいた。
「中安遺跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 大分市教育委員会 2001
- (4) 『国指定史跡亀塚古墳整備事業報告—保存整備事業（ふるさと歴史の広場事業）—』大分市教育委員会 2000
- (5) 今田秀樹「大分市王ノ瀬天満宮周辺最終の縄文土器」『おおいた考古』第8集大分県考古学会 1997
- (6) 『横塚第2遺跡・久原第2遺跡』大分県教育委員会 1997
- (7) 「浜・長無田遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.4 大分市教育委員会 1995
- (8) 賀川光夫「大分県浜遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1961
- (9) 「久原遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.2 大分市教育委員会 1991
- (10) 「一木遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報』4 大分市教育委員会 1993
- (11) 『浜遺跡』大分県教育委員会 1980
- (12) 大分県前方後円墳研究会「大分県前方後円墳集成Ⅱ—大分市市尾上の坊古墳の測量調査—」『おおいた考古』第3集大分県考古学会 1990
- (13) 註(4) 文献。
- (14) 『大在古墳・浜遺跡—大在土地地区画整理整理事業に伴う発掘調査報告書—』大分県教育委員会 1995
- (15) 註(4) 文献。
- (16) 「王ノ瀬天満宮の家形石棺」『中ノ原 馬場古墳緊急発掘調査—付周辺調査—』大分県教育委員会 1968
- (17) 註(3) 文献。
- (18) 『古代海部の再現 城原・里遺跡第7次調査—第5次調査の概要—』大分県教育委員会 2002
- (19) 「中安遺跡第2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 大分市教育委員会 2000 及び註(3) 文献。

【参考文献】

- 『大分市史』上巻・中巻 大分市史編纂委員会 1987



第2図 坂ノ市土地区画整理事業地区と調査箇所 (1/20000)

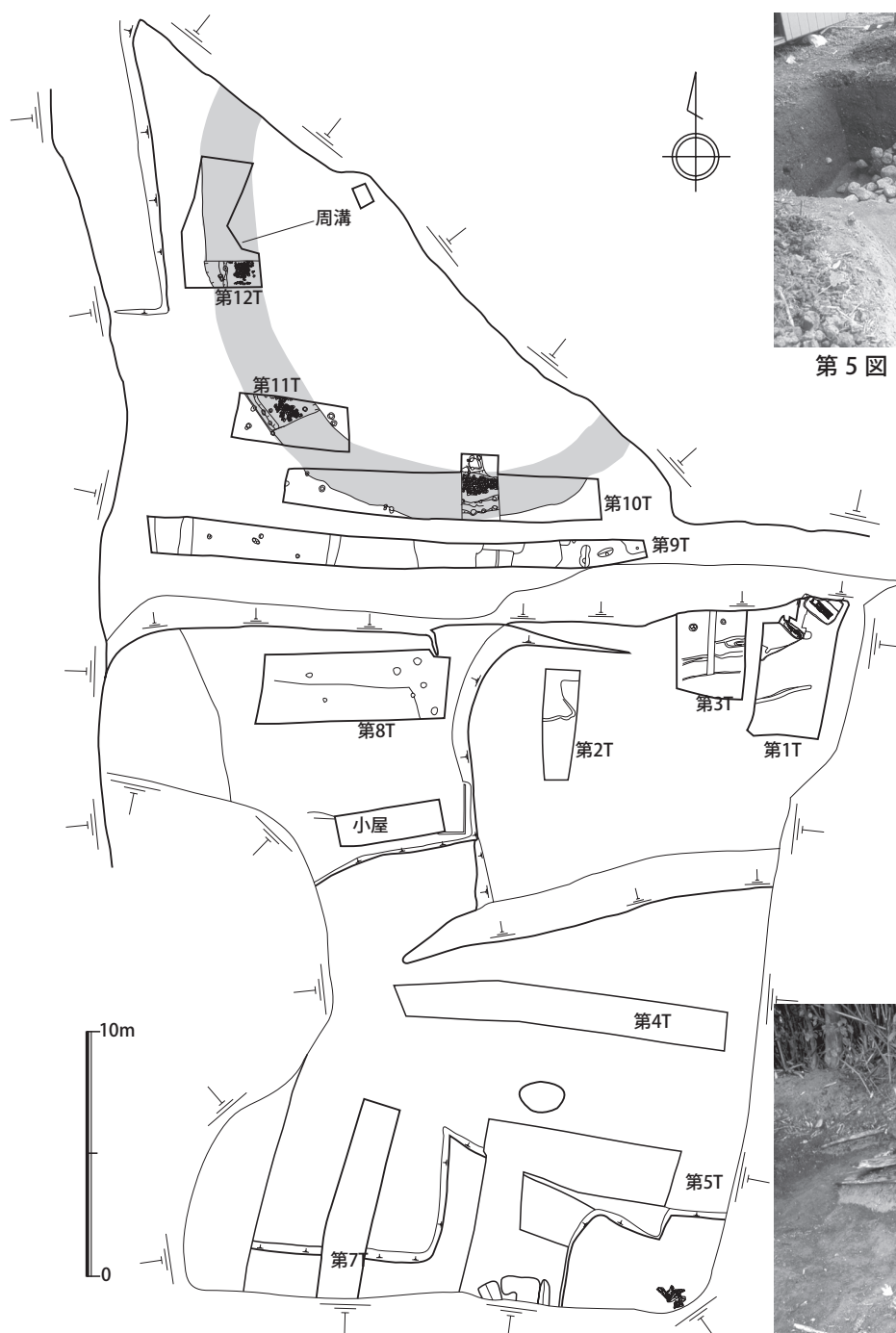


第3図 調査地点位置図 (1/2500)

第2章 試掘調査

試掘調査は平成8年8月5日から平成8年10月31日まで行われた。試掘調査については、既に大分市埋蔵文化財調査年報 vol.8（大分市教育委員会 1997）で報告されたとおりであるが、ここではその概要を記述する。

試掘調査前、当該地は国道197号とJR日豊線によって丘陵の南北を区切られ、独立した丘陵となっており、4段の段状に造成されていた。区画整理直前には、雑木林あるいは畑地であった。最上段の南東端には石棺材とみられる結晶片岩の板状石材が集積されている箇所があり、また、中段には石棺の一部が露出していた。これらが「辻古墳」として周知された遺跡であったものと思われる。このような状況から、確認調査は石棺及び石棺材集積地点周辺を中心に、段造成された各段にトレンチを設定し、計12箇所において遺構の確認を行ったもの



第4図 辻古墳群試掘調査区配置図 (1/600)



第5図 第12T周溝深堀状況（北から）



第6図 石棺調査状況（北西から）



第7図 調査区南東端石棺材の集積（北から）

である。

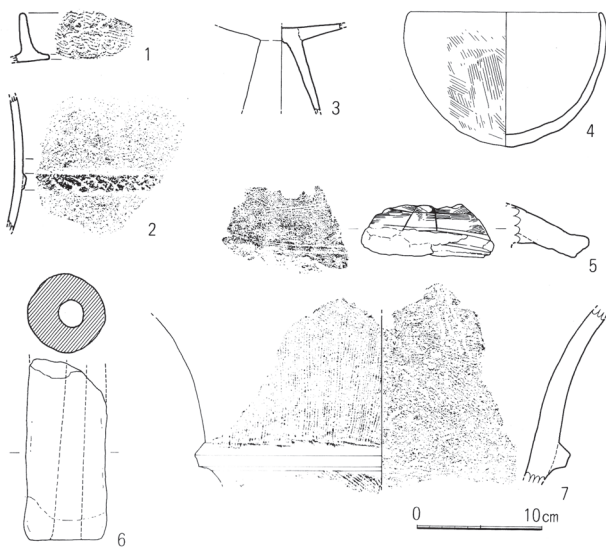
調査の結果、最上段の石棺材集積地点周辺では第5トレンチ南東部で近世以降の石積みが発見されたのみで、石棺材と関連づけられる遺構は全く確認できなかった。古墳が存在した可能性はあるものの、既に削平されてしまったものと考えられる。

中段の露出した石棺周辺ではこれに伴うと判断される古墳時代前期の遺構（この時点では「祭祀土坑」と解釈された）が発見された。なお、石棺については、崖面に小口部分が露出した状態であったため、放置すれば崩落の危険も考えられたため、全体を検出するとともに石棺内部の発掘調査を実施した。

最下段においては第10～12トレンチにおいて大型古墳の周溝とみられる遺構が発見された。各トレンチにおいて、周溝内部の一部掘り下げを実施した結果、周溝の幅は4.4m以上、深さは1.0m以上であることが判明し、未周知の大型古墳が存在することが明らかとなった。新たに発見された古墳は、この時点では直径40mを超える規模と推定され、周溝からは円筒埴輪をはじめ家形埴輪、蓋形埴輪が出土し、葺石も出土したことから、亀塚に後続する首長墓であることが強く窺われることとなった。

中・下段の第3、8、9～12トレンチでは柱穴群が発見され、出土遺物から、平安時代の建物跡と推定されたが、古墳マウンドの削平と段造成についてもこの時期になされた可能性があるという推定された。

なお、第9図は試掘時に第10トレンチ内古墳周溝から出土した縄文時代の扶状耳飾で、メノウもしくは玉髄製である。



第8図 試掘調査時出土遺物（年報8掲載：1/6）



第9図 扶状耳飾実測図（2/3）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

本調査は、平成8年度の試掘調査結果を踏まえ、最上段部分を除外して、石棺と石棺に伴う遺構の検出された試掘調査第1～3トレンチ周辺以下の3段からなる地割を対象とした。なお、試掘調査時に確認されていた2基の古墳について、周溝を有する大型の古墳を辻1号墳、石棺を主体部とする古墳を2号墳として記述することとする。

本調査にあたっての課題としては下記のようなものが考えられた。

- ① 1・2号墳以外の墳墓の存在確認
- ② 1号墳の墳丘・主体部の検出と墳形・規模の確定
- ③ 1号墳の時期比定
- ④ 1号墳削平時期と、周辺柱穴群（建物群）および段造成の時期比定
- ⑤ 2号墳関連遺構の検出と墳形・規模の確定

このうち④については、調査対象地区付近には古代の豊後国の国津である「坂戸津」が所在したことが想定されていたこと、試掘調査時では段造成と建物群が平安時代に比定される可能性が指摘されていたことから、本調査では特にこれを踏まえた調査を行う必要が意識された。

調査は平成12年3月1日から重機による表土剥ぎを開始し、その後人力による遺構検出作業及び遺構の掘り下げを実施した。年度を挟んで実施したため、事務手続上の都合により4月の1ヶ月間は作業を中断し、平成12年5月6日から再開した。検出された大型古墳（1号墳）を中心として遺構検出範囲全域の図化を行うため、空中写真測量を実施することとし、1号墳の調査進捗に合わせて8月13日と9月12日に図化用の空中写真撮影を行った。最終的に発掘調査を行った総面積は2370㎡である。

調査の結果、すでに確認されていた2基の古墳に加え、近世の溝、石組み遺構、建物跡等も検出されたが、他に古墳時代の墳墓は検出されなかった。1号墳については、大規模な周溝が検出されたが、周溝の形状に加え戦後の空中写真等の資料も検討した結果、前方後円墳の可能性が高いことが新たに判明した。また、墳丘の削平時期については周溝の出土遺物から近世の可能性が高いことが推定され、段造成についてもその時期に行われたと考えられる。2号墳については、新たに方形に巡る周溝が検出され、箱形石棺を主体部とする方墳であったことが推定された。

第2節 辻1号墳

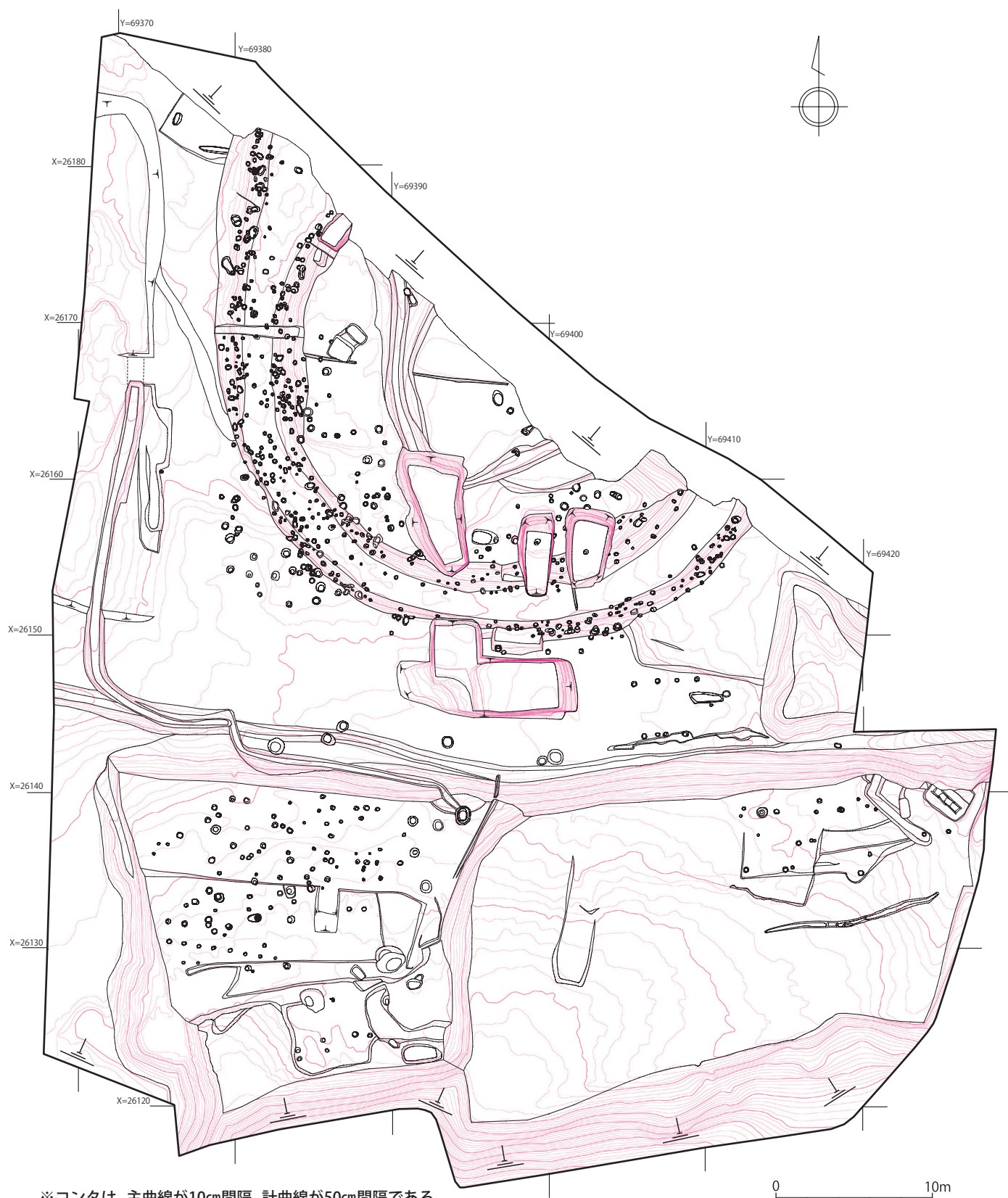
1号墳の墳丘は完全に削平されており、周溝とみられる遺構の他には主体部等の遺構は全く検出できなかった。

(1) 周溝（SD001）

周溝と考えられる大規模な溝状遺構が検出された。遺構の内周は直径約26.1mの円形に復元されるのに対し、外周は調査区西側から北西端にかけて直線的に北側に延びており、これによって、溝状遺構の北西部では幅が大きく広がっていることが確認された。平面形態からみて、前方後円墳の周溝である可能性が高いと考えられ、後円部を南側に向けた前方後円墳の後円部からくびれ部付近の周溝と考えられる。

なお、SD001の調査にあたっては、内周26.1mの円弧を2mごとに区切る形で溝全体を22分割し、A～Vまでの記号を割り振った区ごとに掘り下げをおこない、層位ごとに遺物取り上げを実施した。（第12図）

遺構南西側の最も狭い部分H～I区で幅約3.5m、東側の広い部分T～U区で約6.2m、北西端の最も広い部分では幅9mを超え、検出面からの深さは最も浅い南西部H区で0.7m、南東部の最も深い箇所Q区で1.2mを測る。断面は底部が緩やかな湾曲をもつ逆台形あるいは緩いU字形である。

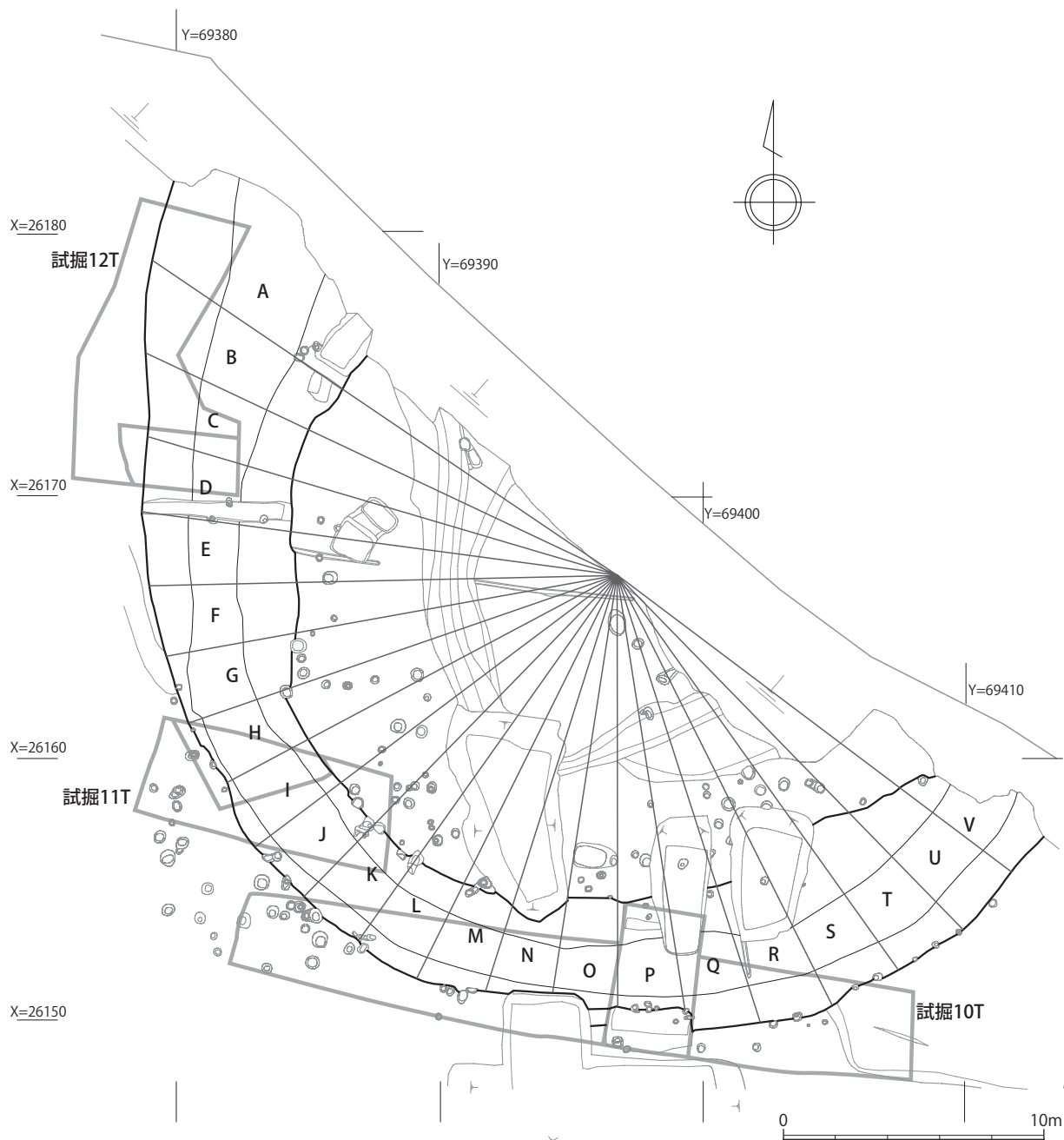


※コンタは、主曲線が10cm間隔、計曲線が50cm間隔である。

第 10 図 辻古墳群検出遺構全体図 (1/350)



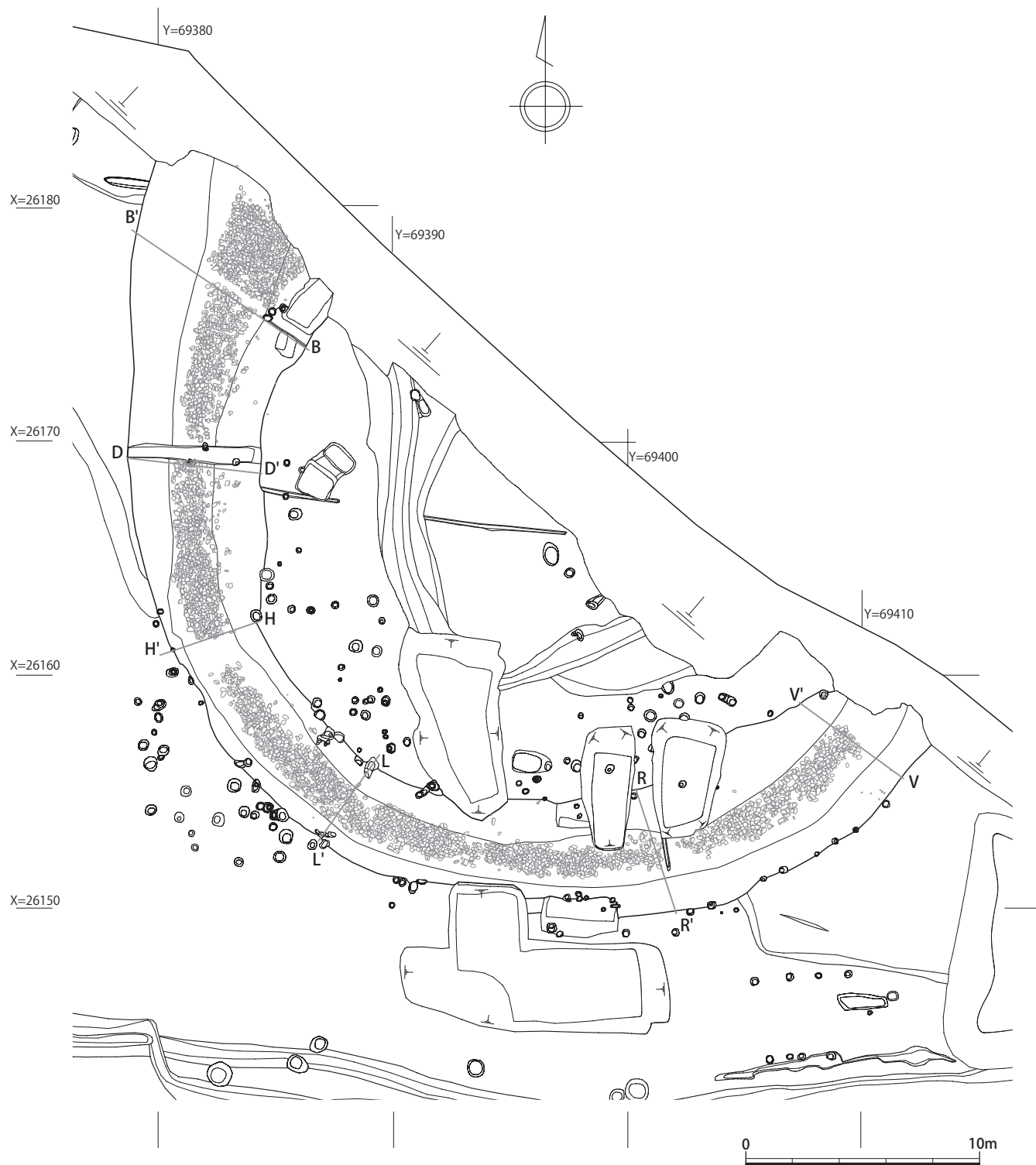
第 11 図 1 号墳周辺検出遺構全体図 (1/300)



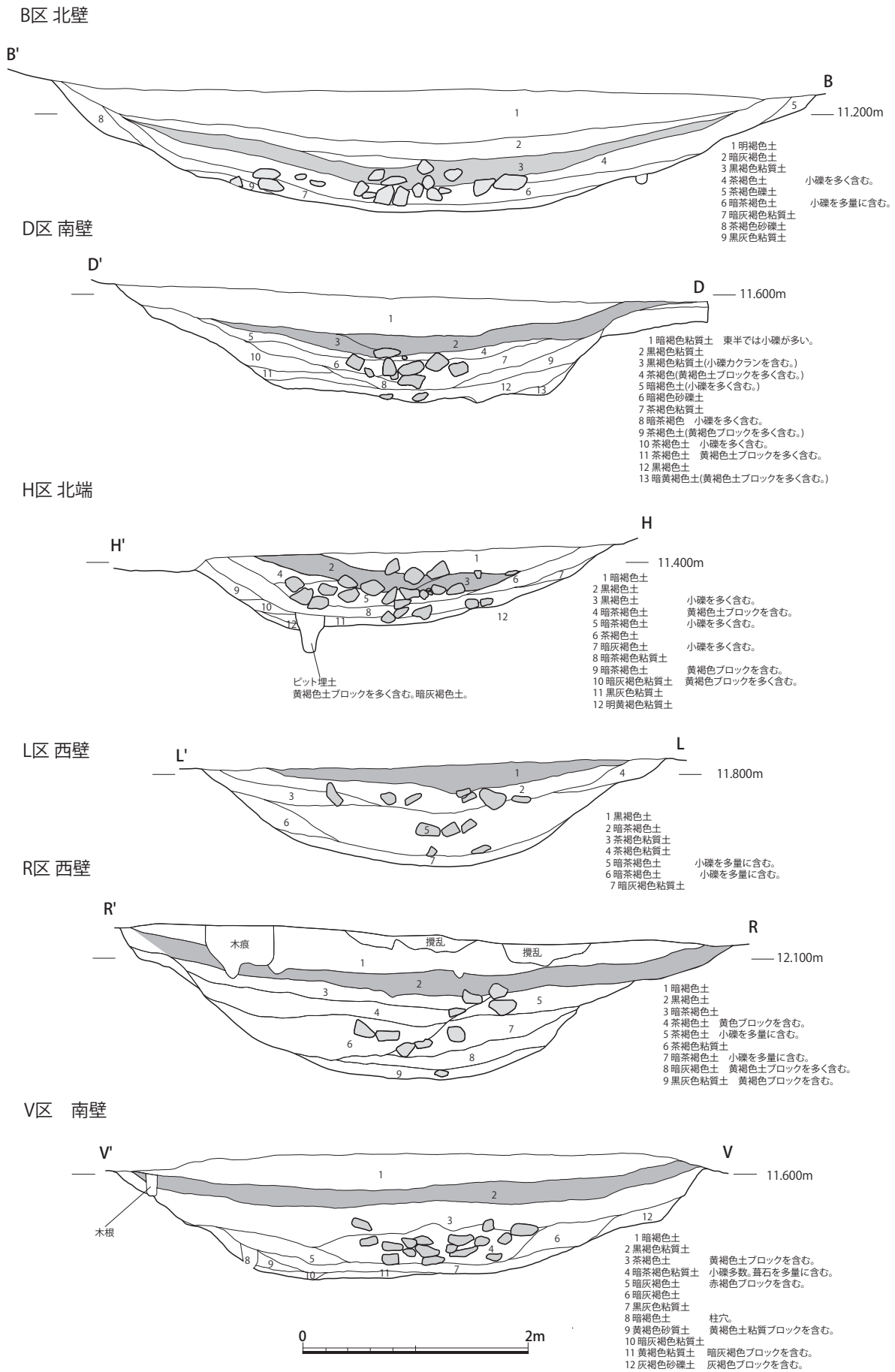
第 12 図 1 号墳調査区設定図 (1/250)

SD001 の埋土中からは葦石とみられる多量の礫が全域で出土した。葦石自体の分析は後述する。SD001 の各断面で観察される土層堆積状況によれば、葦石がまとまって出土する層位は埋土の下底ではなく間層を挟んで上位であり、一定程度の土砂流入後に葦石が転落していることを示している。葦石の堆積土層中からは、9 世紀代と推定される須恵器壺（第 21 図 18）や土師器碗（第 21 図 1 ～ 5）、黒色土器碗（第 21 図 7 ～ 9）が出土しており、この時期までには葦石の転落が進んでいたと推定される。葦石の堆積土層もしくはこれよりも上層には黒褐色土が層厚 20 ～ 30 cm 認められ、各土層断面においては黒色ベルト状にはっきりと認識できる。この黒褐色土層は長期にわたって地表に露出した状況で黒色化が進んで形成されたと考えられ、同時性を示す鍵層とも言うべき土層である。U 区では葦石出土層からさらに間層を挟んで上層に同層が堆積しているが、この付近では葦石の転落・堆積後間をおかずさらに土砂が流入した後に安定し、黒褐色土が形成されたということになろう。

黒褐色土から出土した遺物には 12 ～ 13 世紀に比定される土師器碗・小皿、白磁碗片があるが、最も新しく位置づけられるものは 16 世紀後半に比定される青花碗（第 21 図 20）である。この土層堆積の下限が当該期に比定されることを示していると判断され、この時期の周溝は浅い凹みの状態であったと考えられる。



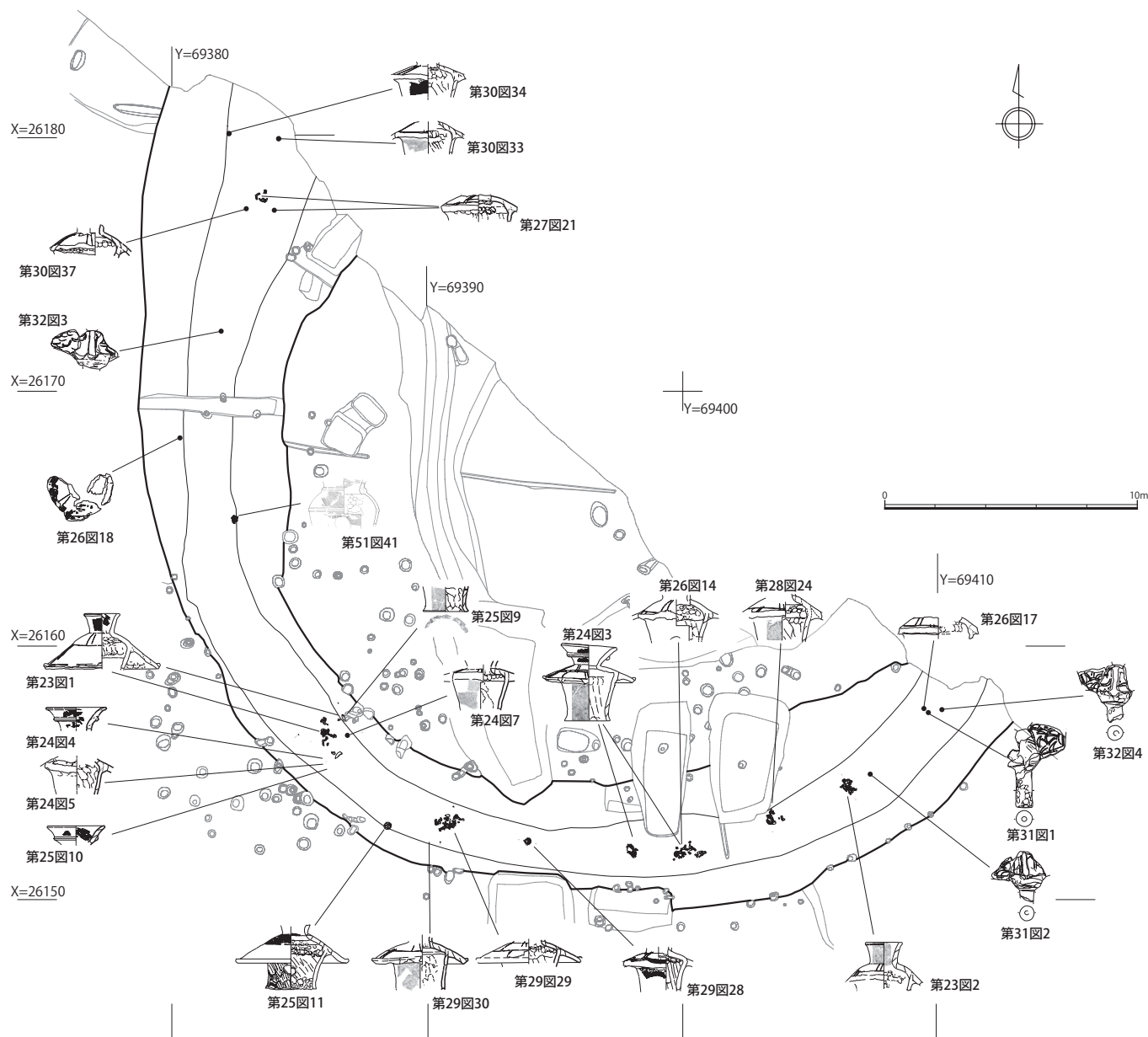
第 13 図 1 号墳墓石出土状況・土層断面位置図 (1/250)



第 14 図 SD001 土層断面図 (1/50)

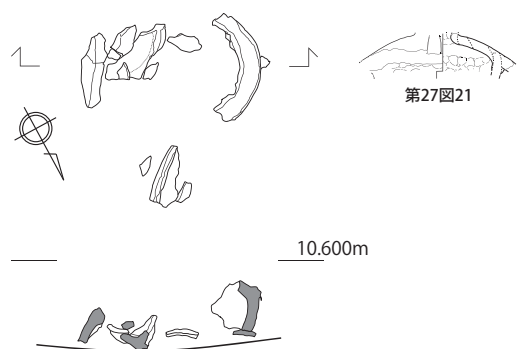
SD001 埋土の最上層は削平を受けている L 区付近を除いて層厚 30 ～ 60 cm の暗褐色土層である。この土層の形成は黒褐色土層より新しく、近世に比定される可能性が高く、短期間に堆積していると判断される。暗褐色土からも埴輪が出土していることから、墳丘上の土が流入した可能性が高いと考えられるが、後述するように、元々の墳丘の場所には 18 世紀以降に溝状遺構等が掘り込まれており、その時期までには墳丘が削平されるとともに SD001 が完全に埋積してフラットになっていたと推定される。従って、この暗褐色土の流入については、墳丘の削平とあわせて行われた埋戻しとも考えられる。

SD001 から出土した遺物のうち、大半を占めるものは埴輪であり、主として黒褐色土及びこれよりも下層の土層から多量に出土した。埴輪には、多量にみられる円筒埴輪、朝顔形埴輪以外に多数の蓋形埴輪をはじめとする形象埴輪が出土した。調査の際には先述したような区割りを行って出土位置と層位の把握につとめ、特にまとまって出土したものについては出土状況の記録も行った。しかし、埴輪の平面的な分布状況について、有意な偏りはみられなかった（第 15 図～第 17 図）。ただ、個体数が 2 個体以下と少数である家形埴輪は C・D 区及び試掘 12 トレンチから出土している。



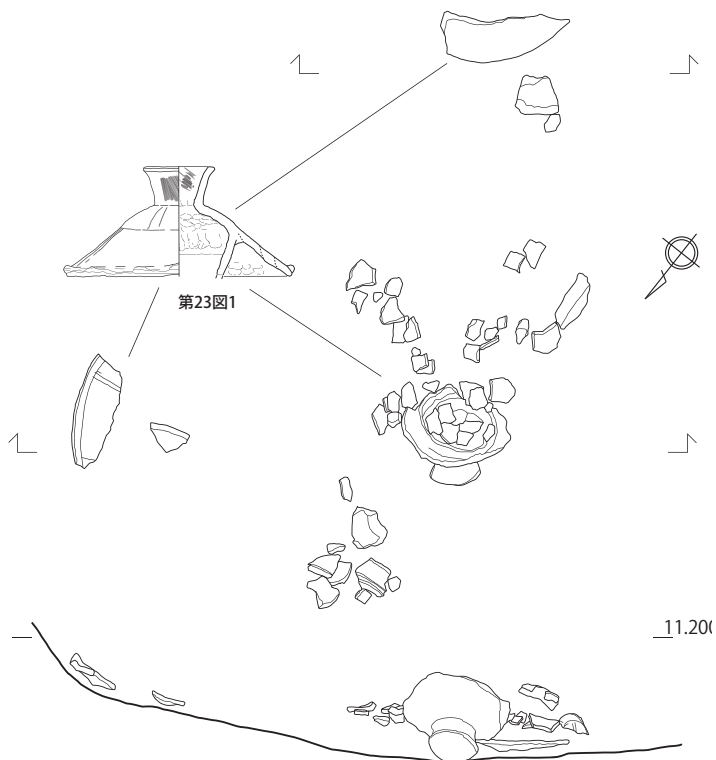
第 15 図 1 号墳周溝内埴輪出土状況図 1 (1/250)

SD001 A区



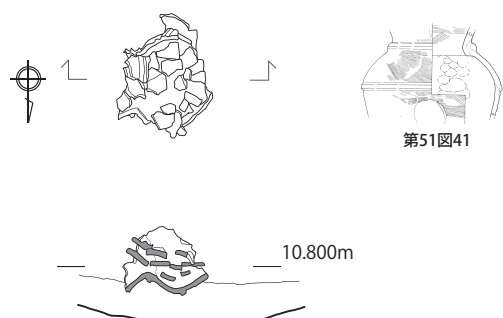
第27図21

SD001 J・K区



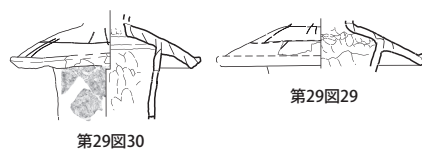
第23図1

SD001 F区



第51図41

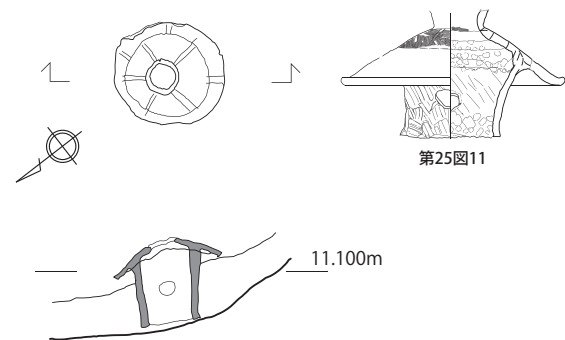
SD001 M区



第29図29

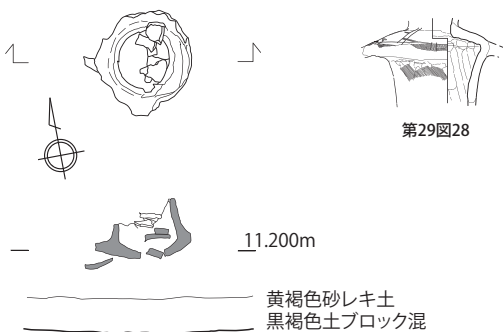
第29図30

SD001 L区

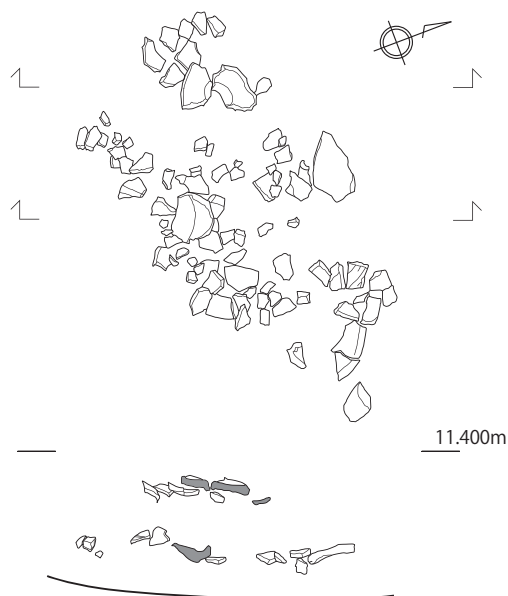


第25図11

SD001 N区



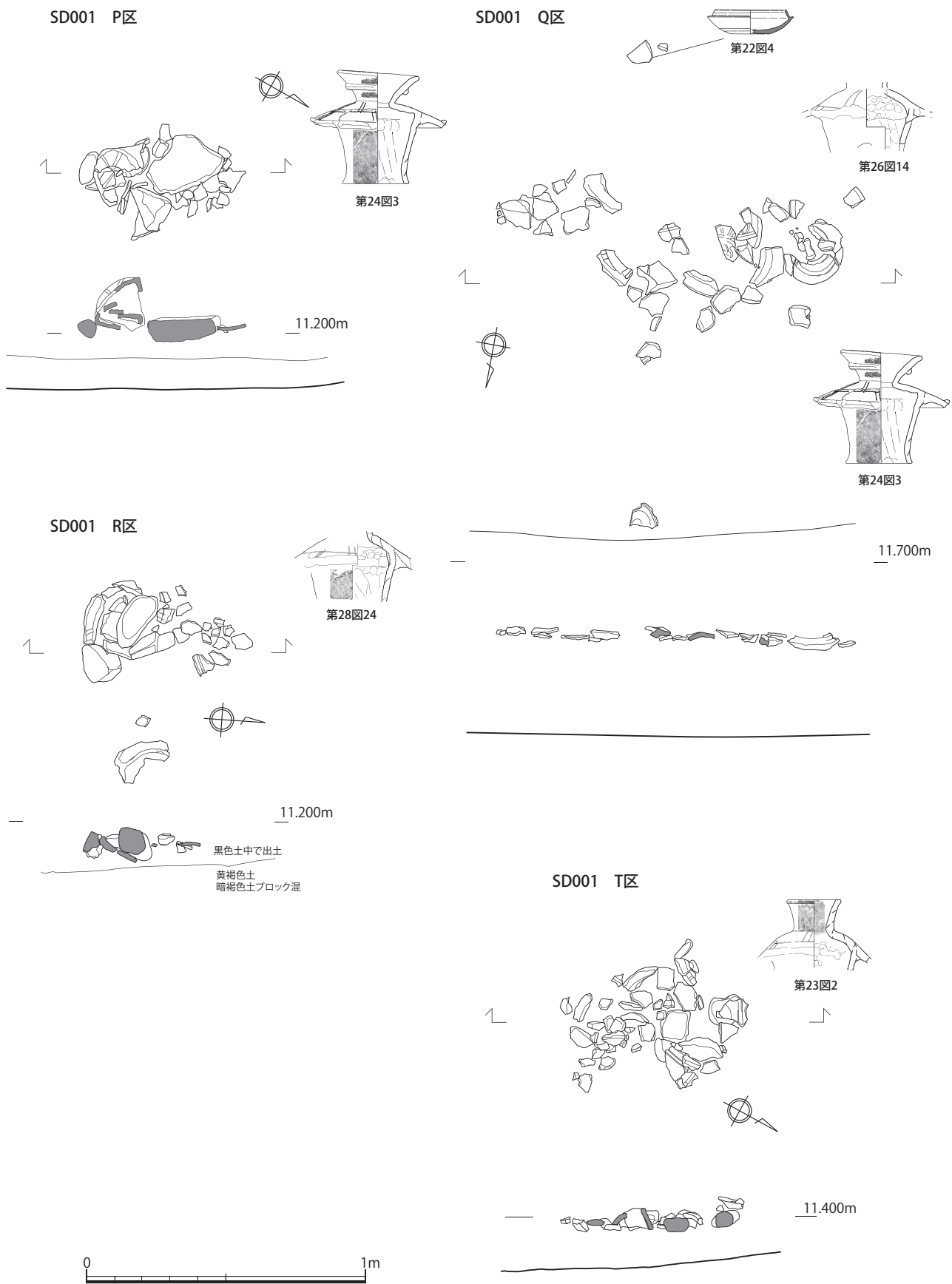
第29図28



11.400m

0 1m

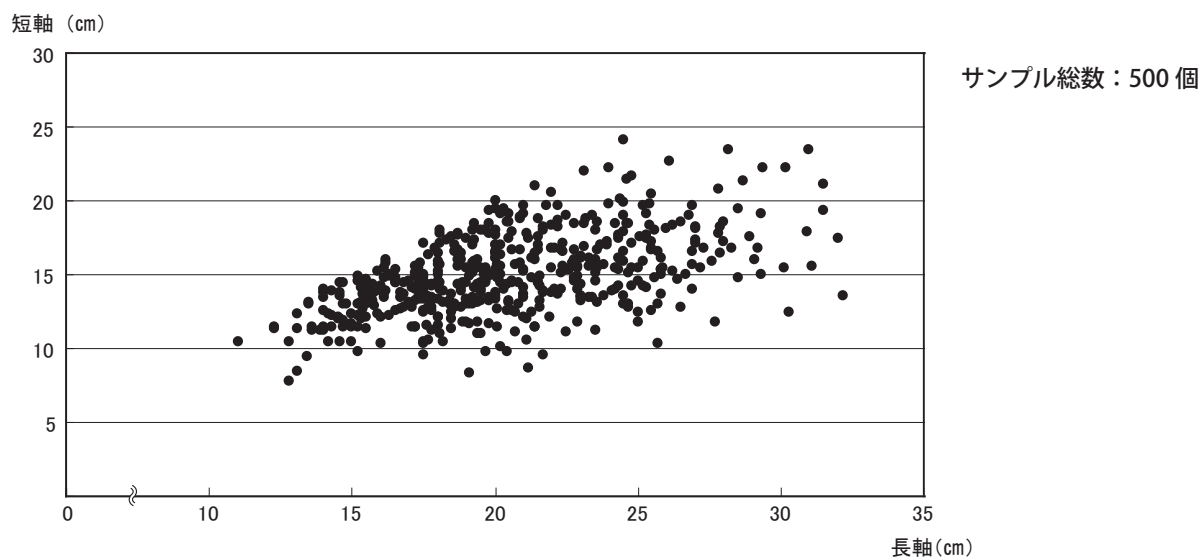
第 16 図 1 号墳周溝内埴輪出土状況図 2 (1/20)



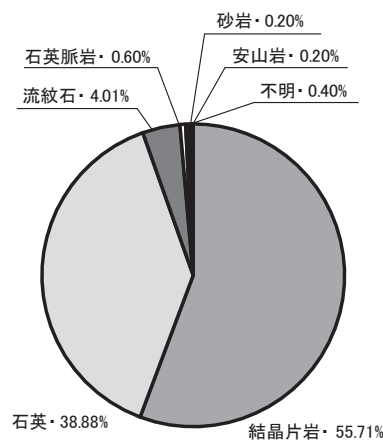
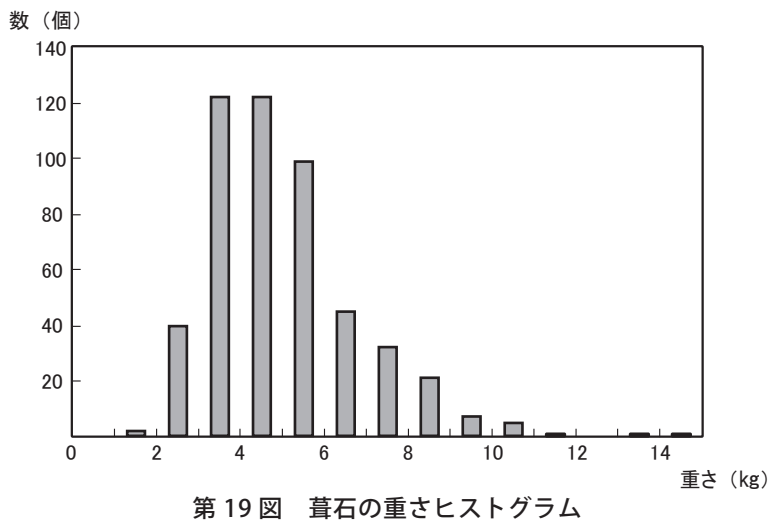
第 17 図 1 号墳周溝内埴輪出土状況図 3 (1/20)

葺石

墳丘が完全に削平されているため、葺石は原位置を保ったものは全くなく、周溝SD001内から出土したもののみである。SD001中の全域にわたって多量に出土し、墳丘上から転落して周溝に流入したと考えられる。これらは概ね拳大のものから人頭大のものが中心である。A区内で出土したものから500点を抽出して計量ならびに分析した結果が第18図～第20図である。大きさとしては長軸10 cm～25 cm、短軸10 cm～20 cm、重量では3 kg～5 kgのものが主体である。中には長軸30 cm、重量10 kgを超える非常に大形のものも含まれている。同じ500点について石材別に分類すると結晶片岩と石英で90%以上を占めており、中央構造線沿いに位置する佐賀関半島特有の岩石組成を反映したものといえる。この石材構成については亀塚古墳で使用された葺石と類似しており、基本的にはどちらも在地で調達した石材とみられる。亀塚古墳で葺石として使用された礫よりも大型の石が多い印象を受けるが、亀塚古墳においても、根石として使用された石には20～30 cmのものが多くとされており⁽¹⁾、概ね同様の礫が選択されたと思われる。



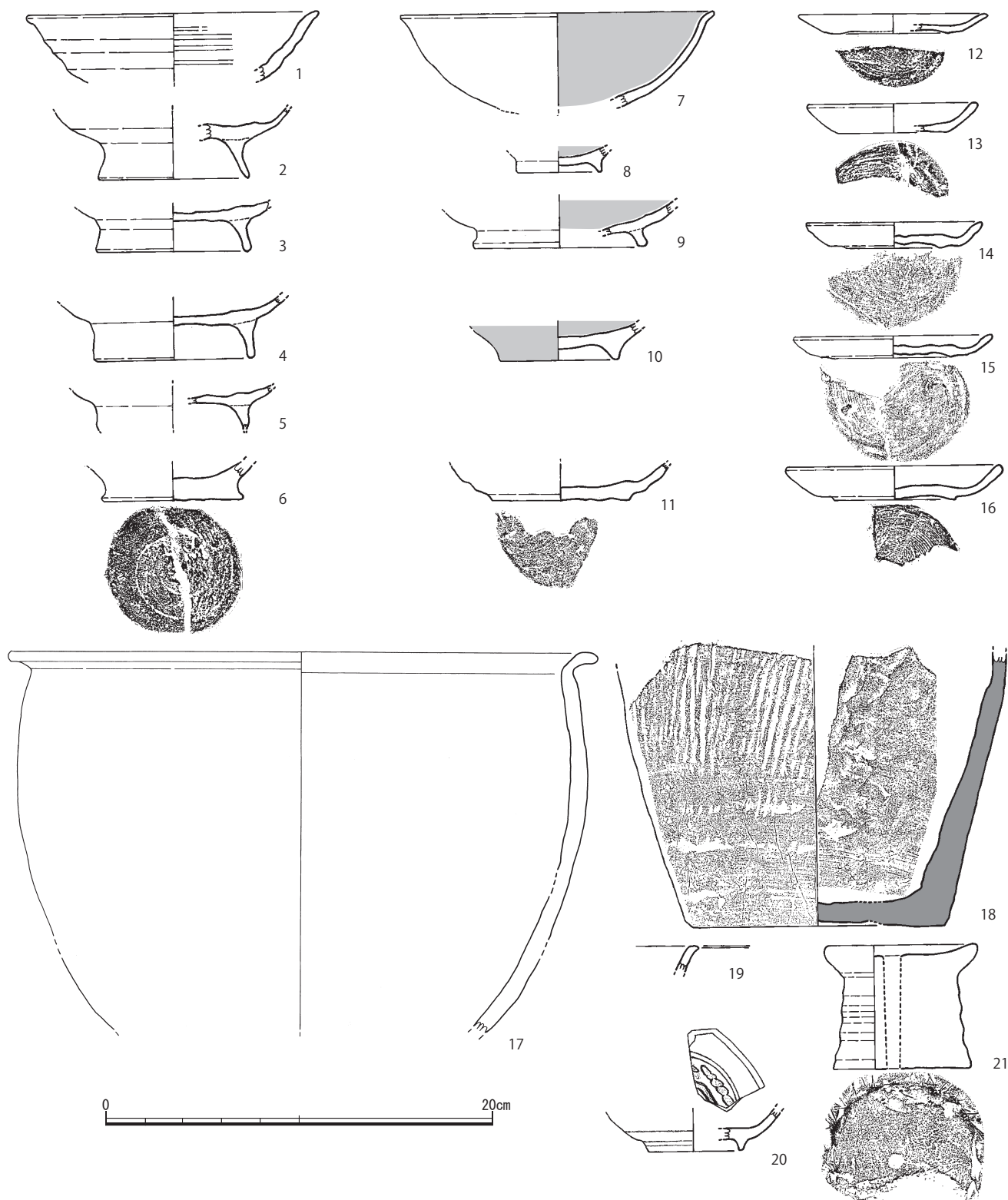
第18図 葺石の大きさ分布図



(2) 周溝 (SD001) 上層出土遺物

第 21 図は周溝の上層、暗褐色土から黒色帯状にみられる黒褐色土、葎石を多数含む土層上面にかけて出土した遺物である。

1 は土師器坏である。内面には疎らなミガキが見られる。9 世紀前半に比定される。2 ～ 5 は高い高台が貼り付けられた坏である。6 は厚い底部を有する土師器坏で、底部はヘラ切り痕が認められる。7・8・9 は黒色土器



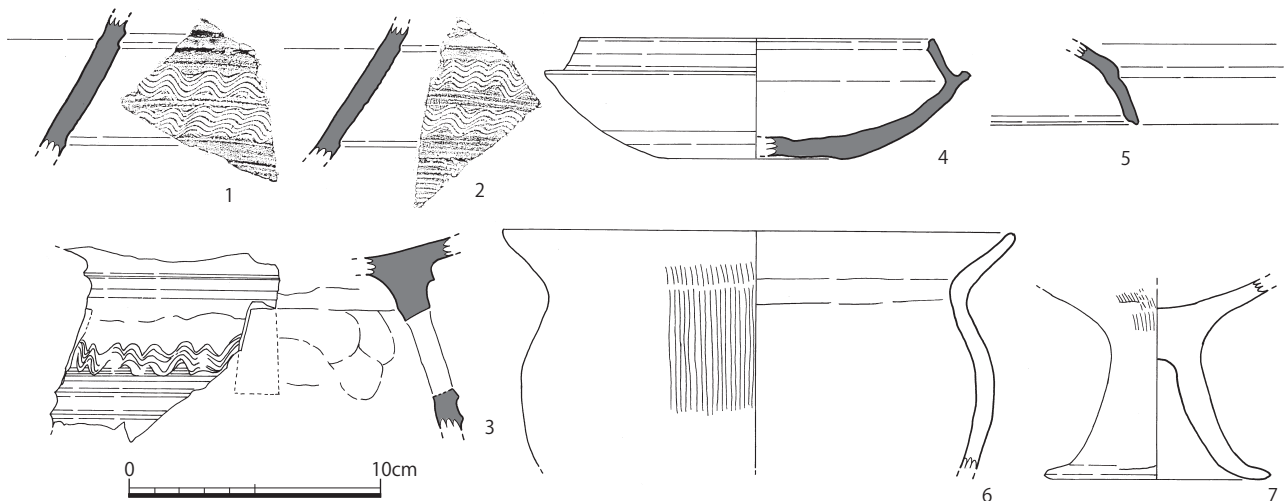
第 21 図 1 号墳周溝上層出土遺物 (1/3)

A 類である。10 は瓦器碗で、九州在地のものと思われる。11 は土師器坏で底部は糸切りである。12～16 は土師器小皿である。胎土は水簾を行ったと思われる、極めて緻密で砂粒をほとんど含まないもので、明灰褐色を呈する。底部は糸切りである。口径は復元値であり、ゆがみも大きいデータとして問題をはらむが、口径は7～8 cm、器高は2～2.5 cmであり、極めて低平でまた底径に比して口径が大きい。11～12 世紀に比定される可能性がある。17 は8～9 世紀に比定される土師器甕である。内外面はナデにより調整され、ハケメはみられない。18 は須恵器壺である。平底であり、外面には平行タタキ、内面には当て具痕が認められる。19 は白磁碗V 類である。20 は周溝に流入した葺石より上位の黒褐色土中から出土した青花碗で、いわゆる饅頭心碗である。21 は土師質土器の灯火具で坏部から底部にかけて穿孔されている。底部はナデ調整されており、糸切り痕は認められない。明灰褐色系の色調である。

(3) 周溝 (SD001) 出土遺物

① 須恵器・土師器 (第22 図)

1～3 は須恵器器台で、同一個体の可能性がある。1・2 は坏部である。稜は低く残存しており、稜の間は櫛描波状文が充填される。3 は器台の脚部であり、長方形の透かしが2ヶ所に確認される。おそらく4 方向に穿たれていたものであろう。坏部直下に1 条と透かしの下に稜が2 条みられる。1～3 については古式の須恵器の特徴をまだ残しているものの、稜は低く、また脚部の櫛描波状文の施文もやや簡略化された印象を受けることから陶邑編年TK208 型式以前ではなく、TK23 型式に相当するととらえておきたい。しかし、これは埴輪を除く周溝出土遺物中で最も古く位置づけられるものであり、古墳築造年代を表すと考えられる。4 は須恵器坏である。口縁端部は低い段を有しているが立ち上がりの角度はやや緩い。口径13.8 cm、最大径は16.9 cm に復元される。形態的な特徴からは、陶邑編年TK10 型式に比定される。本資料は、Q 区の上層から出土したもので (第17 図)、層位的にも明らかに埴輪が集中的に出土した層位よりも上位である。従って、古墳築造後、一定時間経過した後に流入したものと推定される。5 は坏蓋である。外面の稜は退化し、角が失われている。口縁部には段がみられ、陶邑編年TK10～TK43 型式に比定されよう。6 は古墳時代後期の土師器甕である。7 は古墳時代後期の土師器高坏である。



第22 図 1 号墳周溝出土須恵器・土師器 (1/3)

②埴輪

a. 蓋形埴輪

出土した形象埴輪のうち個体数をもっとも多いものが蓋形埴輪である。整理にあたっては個体識別につとめており、それに基づいて報告するが、笠部内周部が残るものに限定して識別する限りでも 23 個体に達する。

蓋形埴輪 1 類（第 23 図 1・2）

受け部は端部がやや外反するが大きく開くことなく比較的直立しており、凸帯は有しない。立ち飾りの軸部の径にほぼ対応する内径を有する。胎土は、大型の石英粒子を多く含む在地系のものであり、焼成は赤褐色系で、軟質なもの典型的にみられる。胎土・焼成・色調の特徴は立ち飾りと共通した特徴であり、立ち飾りと組み合わせて使用されたと判断できる。笠部には中央に圈線を施文し、さらにこれと直交する 5 対の平行する放射状沈線を圈線をはさみ二段に施文する。笠部の先端は粘土帯を貼り付けた凸帯である。透かしについては、本類型に確実に属するものが 2 点のみであるため確認できないが、円形の透かしを有する可能性がある。

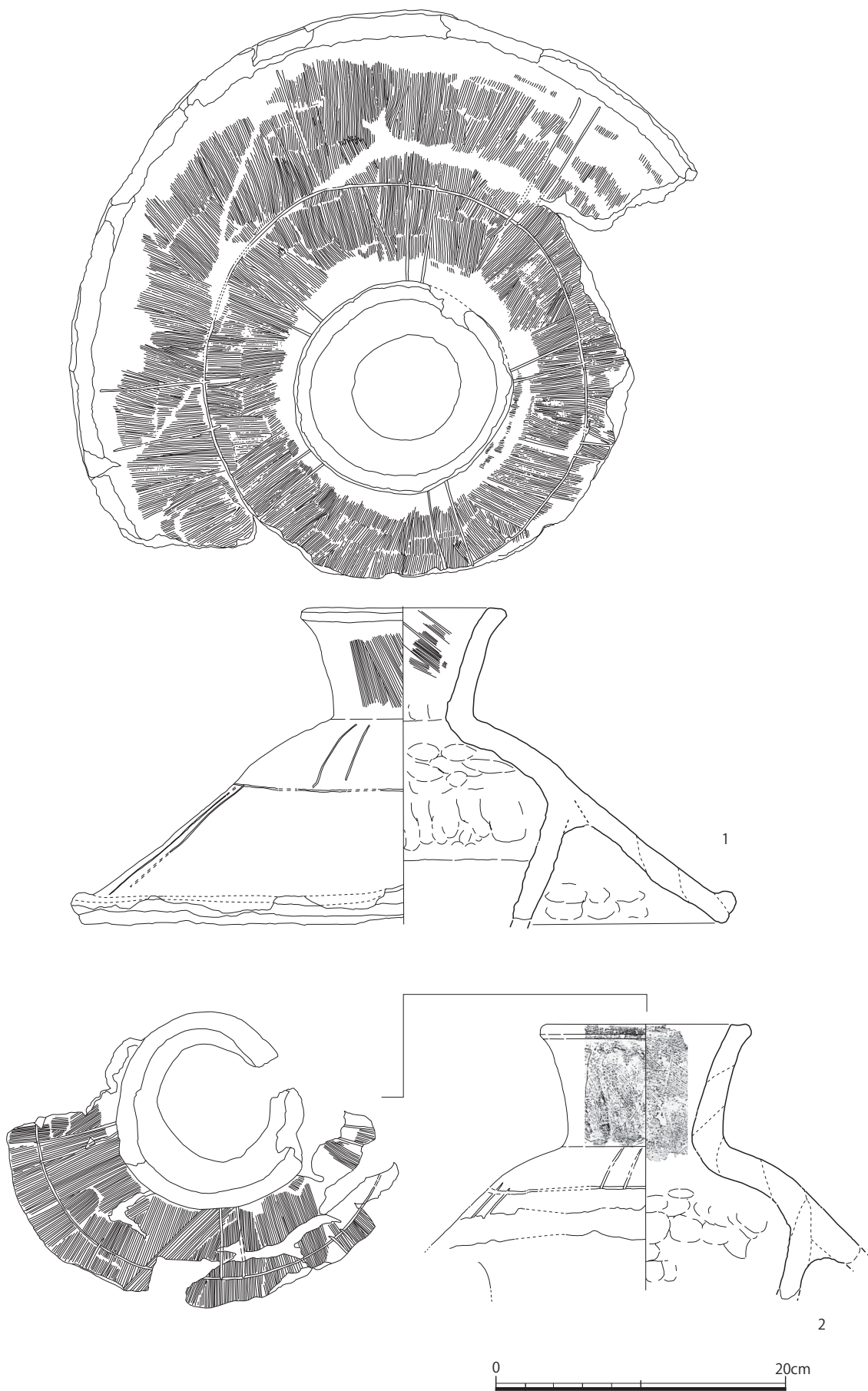
1 は J 区及び K 区底部付近から出土したもので（第 16 図）、受け部全体及び笠部の 1/2 が残存する。赤褐色～橙褐色を呈し、良好な焼成ではあるが、軟質で、表面が剥落しやすい。胎土には 1 cm を超えるものを含む石英粒が混入する。笠部は直径 46 cm で、外面は 9～10 本/cm の比較的細かいハケ目により調整される。笠部上面にはへら状の工具により、一条の圈線を描き、圈線の内外に 5 対ずつの放射状沈線を描いている。線の切り合いでみると、圈線の後に放射状沈線を描いている。圈線内外の放射状沈線の配置は互い違いになるように考慮されているが、均等になるように測られたものではない。笠部下面は成形時および台部接合後の指オサエ痕が著しい。笠部端部には凸帯が貼り付けられる。受け部は比較的直立し、端部付近でやや外反する。端部は上面が平らになるよう調整される。内外面のハケ目は笠部とほぼ同様であるが、笠部と別に成形された際の調整である。受け部は別に成形・調整された後に笠部に接合されており、接合後にヨコナデにより調整されている。笠部の施文は受け部接合・ナデ調整後に行われている。

2 は T 区で出土したもので笠部の外縁部と台部を欠失する。赤褐色を呈し、1 と同様に軟質でよく似た胎土・焼成である。笠部外面にはへら状工具による圈線と内周部に 3 対の放射状沈線、外周部に 2 対の放射状沈線が確認できる。おそらく 1 と同様、圈線内外に 5 対ずつの放射状沈線が描かれていたものとみられる。笠部外面・受部内外面は 10 本/cm の比較的細かいハケ目により調整されている。

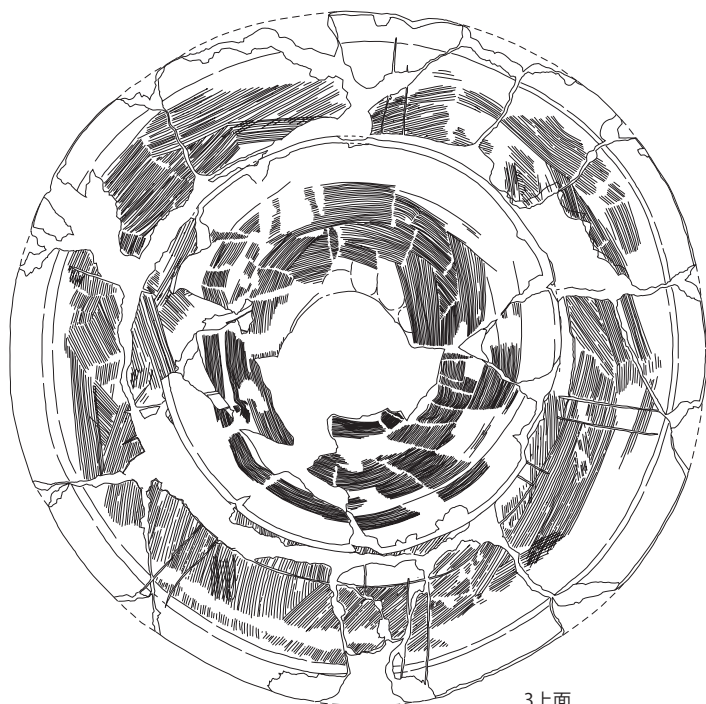
蓋形埴輪 2 類（第 24 図～第 25 図）

発達した受け部を有するものである。受け部は 1 類と比較して大きく、笠部直径の 1/2 を超え、外反しながら大きく開く形態を呈する。受け部外面中ほどに凸帯が貼り付けられる。透かしがあるものとないものがある。笠部には 1 類と同じく圈線を挟んで上下 2 段、5 対ずつの放射状沈線が描かれる。笠部先端には突帯を有する。焼成は明褐色～橙褐色系のものが多くみられ堅緻なものが多く、また、還元焰焼成で灰色～灰褐色系となるものも認められる。これらは焼成の違いはあるが、残存状態の良いものでみる限り形態的な特徴は共通しているようである。一方、立ち飾り及び蓋形埴輪 1 類とは胎土・焼成が異なっており、本類型は立ち飾りを伴わない可能性が高いと思われる。

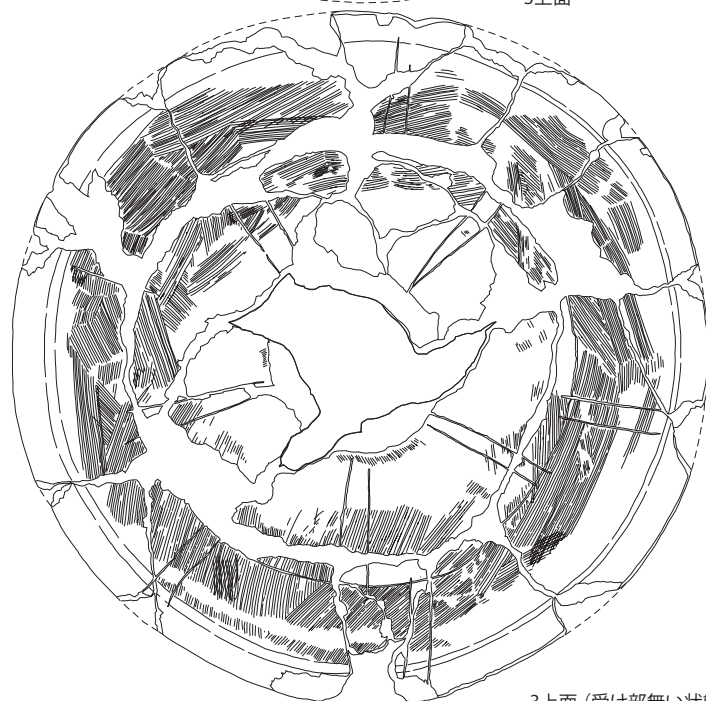
3 は P 区および Q 区から出土したもので、ほぼ完形に復元できたものである。胴部は主に P 区、受け部は主に Q 区からそれぞれ出土した（第 17 図）。明褐色系の焼成で、胴部内面や断面で観察される内部はやや軟質であるが、笠部・受け部の表面は非常に堅緻な焼き上がりである。胎土には径 1 cm を超える大粒ものを含む多くの石英粒が混入している。発達した受け部は外面中ほどに断面が低平な不整形の凸帯が貼り付けられているが、凸帯貼り付け後、凸帯の上方側はナデにより仕上げられて受け部と密着されているが、下方側はナデによる



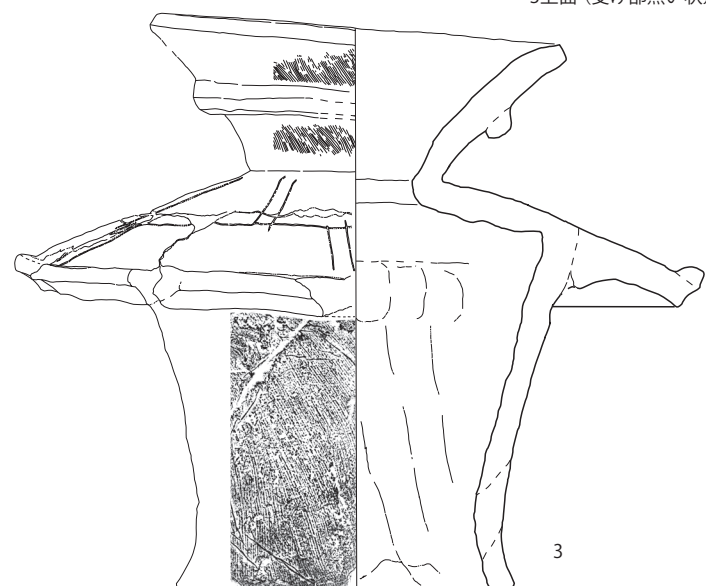
第 23 図 蓋形埴輪 1 (1/4)



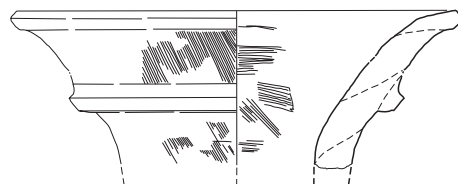
3上面



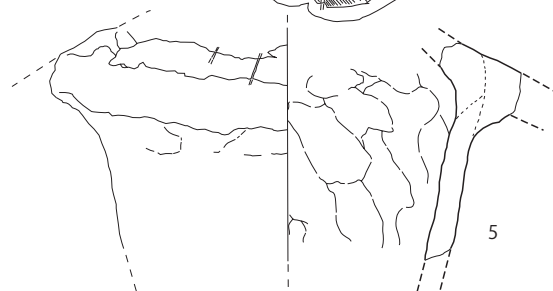
3上面 (受け部無い状態)



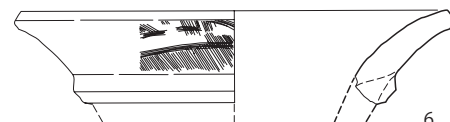
3



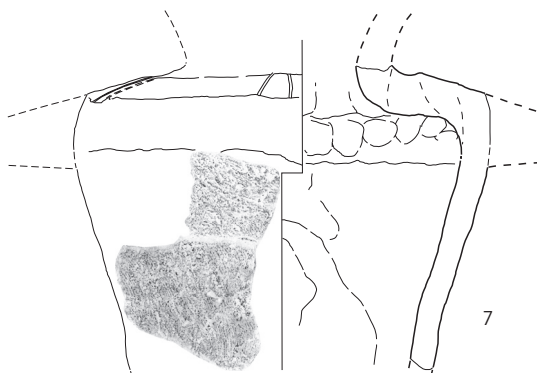
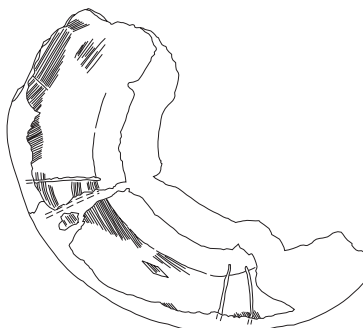
4



5



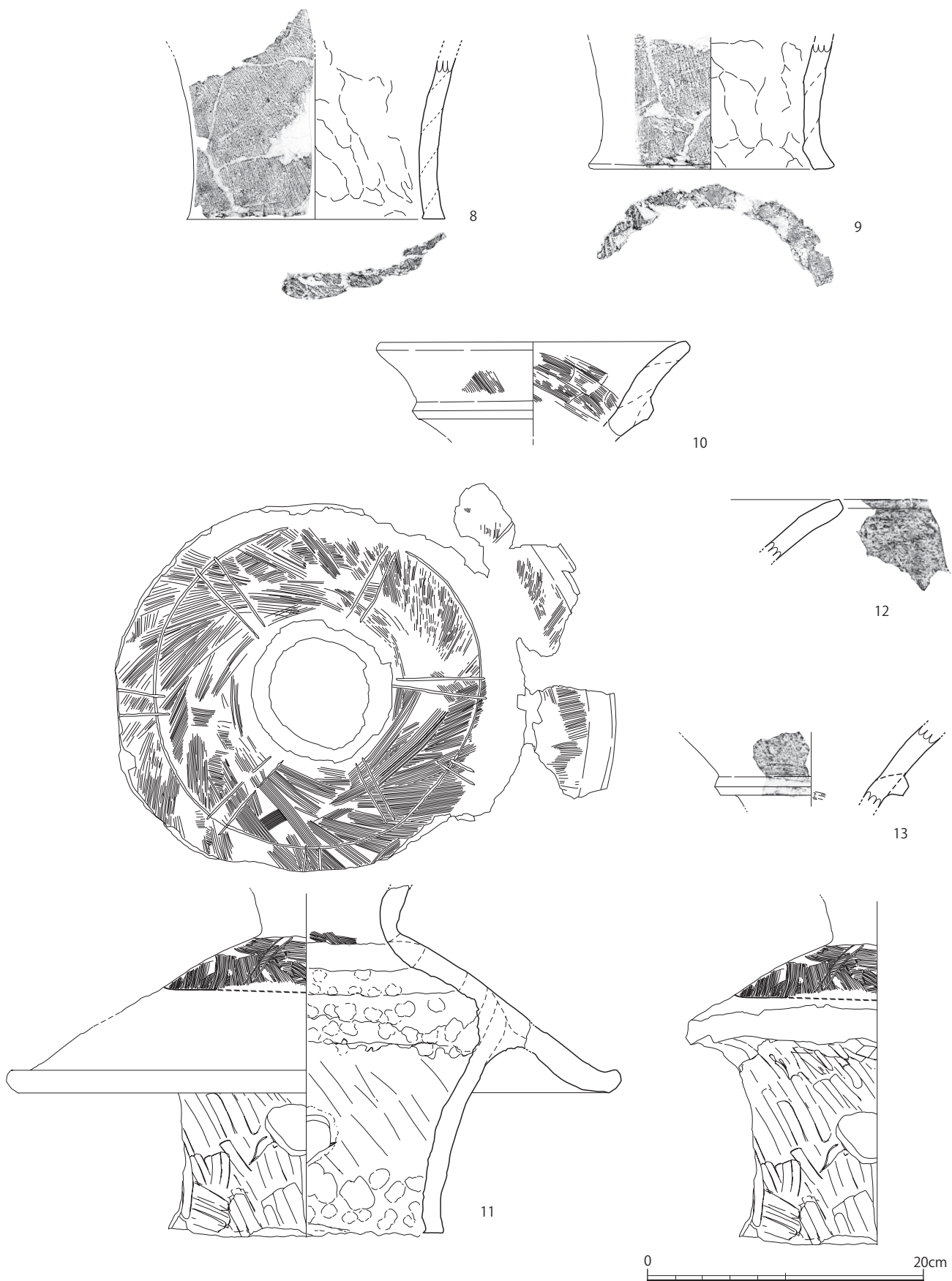
6



7



第 24 図 蓋形埴輪 2 (1/4)



第 25 図 蓋形埴輪 3 (1/4)

密着が行われず、隙間が放置された状態で粗い仕上がりといえる。凸帯貼り付け前に 9～10 本/cm の比較的細かいハケ目により調整される。内面には斜め及びヨコ方向のハケ目調整がみられるが、B 種ヨコハケに類似したハケ目の断続が認められる。笠部は端部に凸帯が貼り付けられ、短く外反するような器形を呈する。上面はハケ目の後ナデ調整、下面には成形時の指おさえ痕が著しく残存する。ハケ目は受け部と基本的に同じ原体を使用したものとみられるが、断続は認められない。上面にはへら状の工具により、一条の圏線を描き、圏線の内外に 2 本 1 組の放射状沈線をそれぞれ 5 対ずつ描いている。線の切り合いを観察すると、圏線を描いた後に放射状沈線を描いたことが明らかである。圏線内外の放射状沈線の配置は互い違いになるように考慮されてはいるが、各 5 対が必ずしも均等になるように測られてはいないようで、とくに圏線外側のものには偏りが看取される。台部は笠部側に向かって緩やかに開き、裾部もわずかに開く形態である。透かしは無い。外面は縦方向のハケ目、内面は成形時の縦方向の粗いナデが残る。ハケ目の密度は受け部・笠部と変わらず、同じ原体とみられる。底部付近に円筒埴輪に見られるような底部調整は認められない。

4～10 は接合しないが同一個体と推定されるもので、J 区から K 区にかけてまとまって出土した。明褐色～橙褐色を呈し、笠部上面から受け部にかけては堅緻な焼成であるが、笠部内面や台部はやや軟質である。胎土には多くの石英粒や結晶片岩粒を含む。台部(8・9)は下方に向かってすぼまり、端部付近が短く外反する形態である。外面は笠部と同様な 10 本/cm タテハケ、内面は粗いナデによる調整である。下端部(底部)は板状の圧痕が認められる

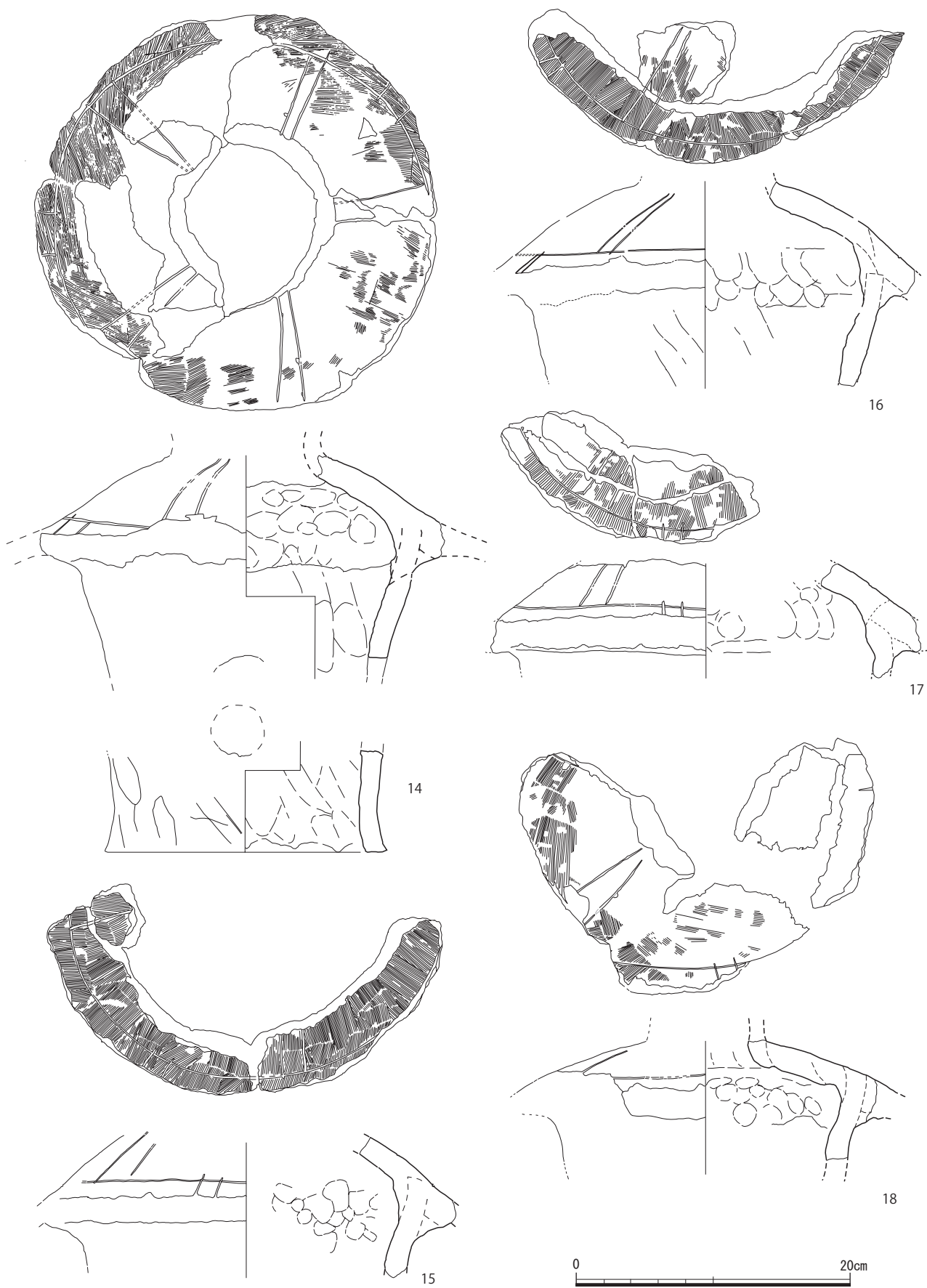
11 は L 区のほぼ周溝下底で出土した。周溝底の外縁寄りの位置で立った状態で出土したものであるが(第 10 図)、これは墳丘側から転落した結果であると考えられる。笠部外縁と受け部を欠いているが、台部は完全な形を保っていた。還元炎焼成により淡灰褐色～灰色を呈し、きわめて堅緻に焼締まっている。胎土は石英粒や結晶片岩片を多量に含む在地のものである。笠部上面の調整は放射状の 10 本/cm の比較的細かいハケ目による。調整後に圏線を描き、さらに放射状沈線を描くが、圏線よりも外周の放射状沈線は笠部の破損のため確認できるのは 4 対である。受け部は一部の破片しか笠部に接合しないが、同一個体と見られる還元炎焼成の破片で同じ L 区出土のものが存在し、3 と同様の受部形状であったと考えられる。受部 13 には笠部と同じ 10 本/cm のハケ目による調整後に断面台形状の凸帯が貼り付けられているが、内面はナデによりハケ目が消されており、この点が 3 と異なる。台部は 3 と同様な形態で、裾部が短く外反する。内面は指オサエとナデ、外面は縦方向の粗いナデが全面にみられる。透かしは台部中ほどのほぼ対称位置に鋭利な工具により穿たれているが、仕上げは粗く、不整な円形を呈し、穿孔後の調整は行われていない。

その他の蓋形埴輪(第 26 図～第 30 図)

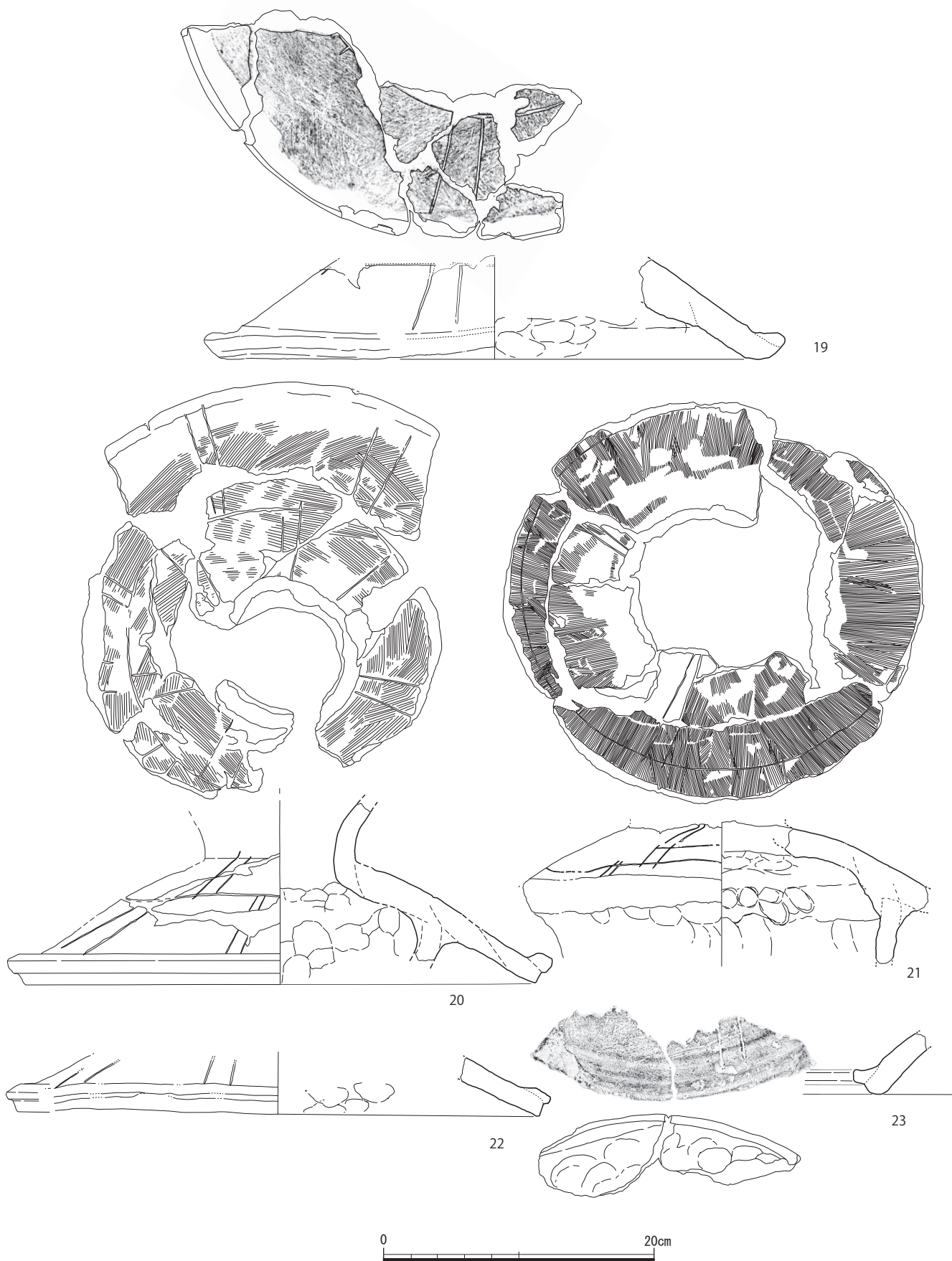
14～19 は色調が赤褐色かつ軟質な焼成のもので、胎土・色調・焼成において 1 類に類似するものである。14 は台部に円形の透かしを有する。16・17 は U 区 V 区で出土したもので、胎土・焼成、調整が類似しており、同一個体の可能性がある。19 は笠部で、第 23 図 1 と胎土・色調・焼成が類似するが、接合しない。同一個体の可能性も考えられる。

20 は受け部が大きく開く形であったことが明らかで、2 類に類似する。笠部外面と受け部は 5～6 本/cm の比較的粗いハケ目で調整される。台部はわずかに残っているのみであるが、外面は 10 本/cm の比較的細かいハケ目により調整される。笠部先端の凸帯は、他の多くが笠部と一体化した滑らかな断面三角形状を呈するのに対し、明瞭な断面四角形を呈しており、より古相を保っているように思われる。色調は赤褐色～橙褐色で軟質の焼成であり、典型的な 1 類と類似する。

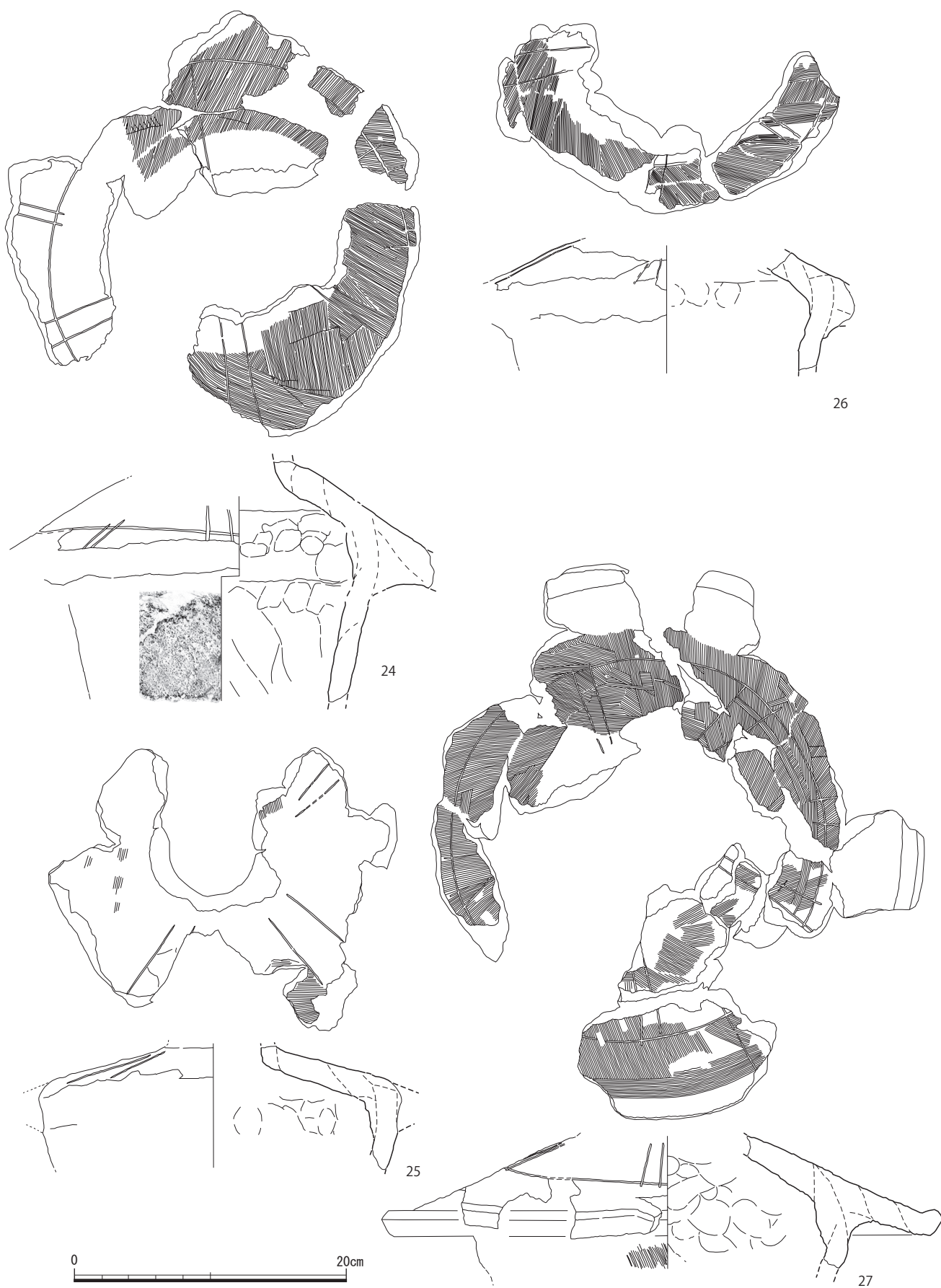
21 は暗橙褐色～橙褐色を呈するが軟質の焼成で、1 類に類似する。圏線の内周には通常 5 対の放射状沈線が 4 対しかみられない。圏線の外周にも 3 対が確認できるが、位置が偏っており、6 対以上描かれていた可能性も



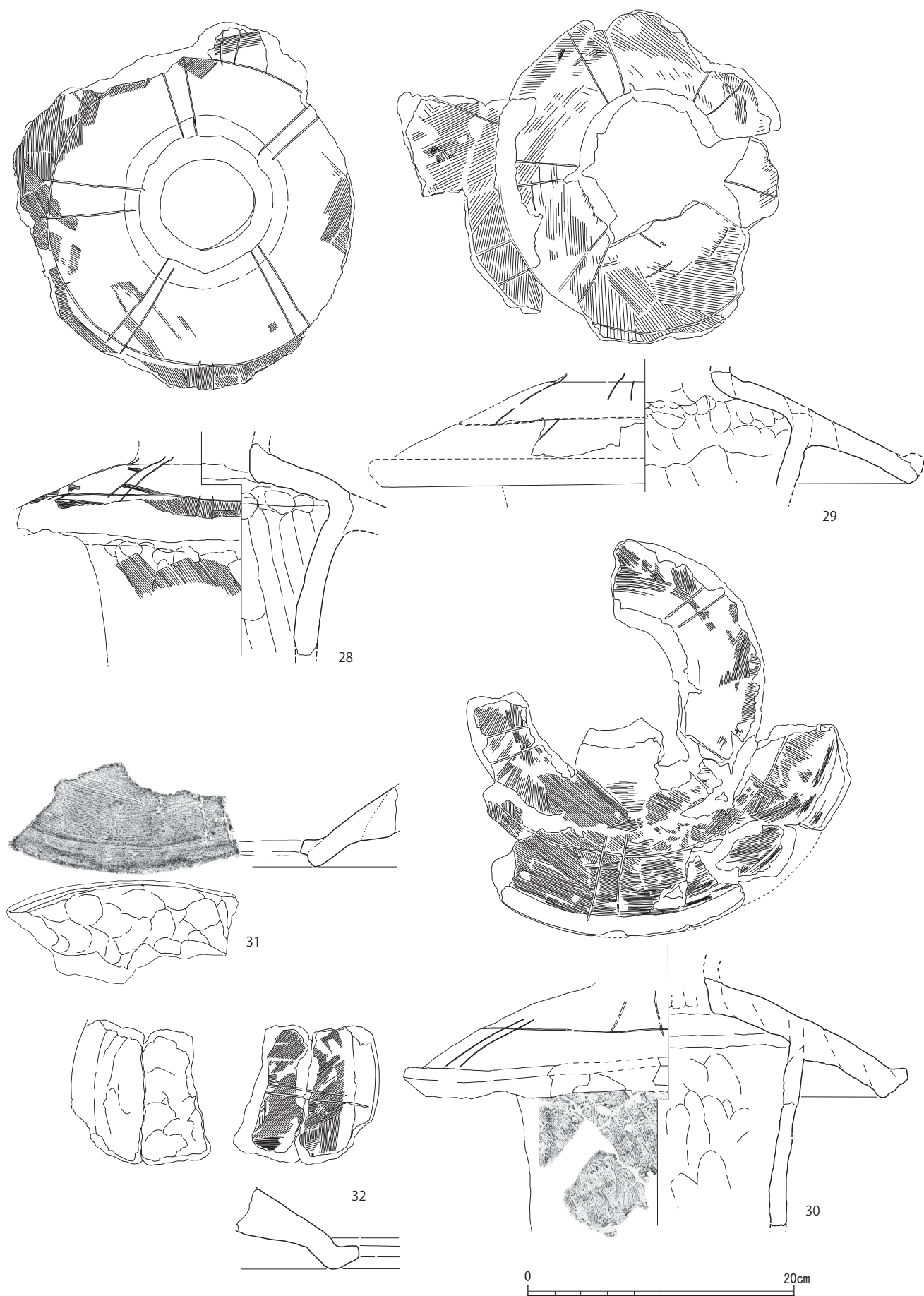
第 26 図 蓋形埴輪 4 (1/4)



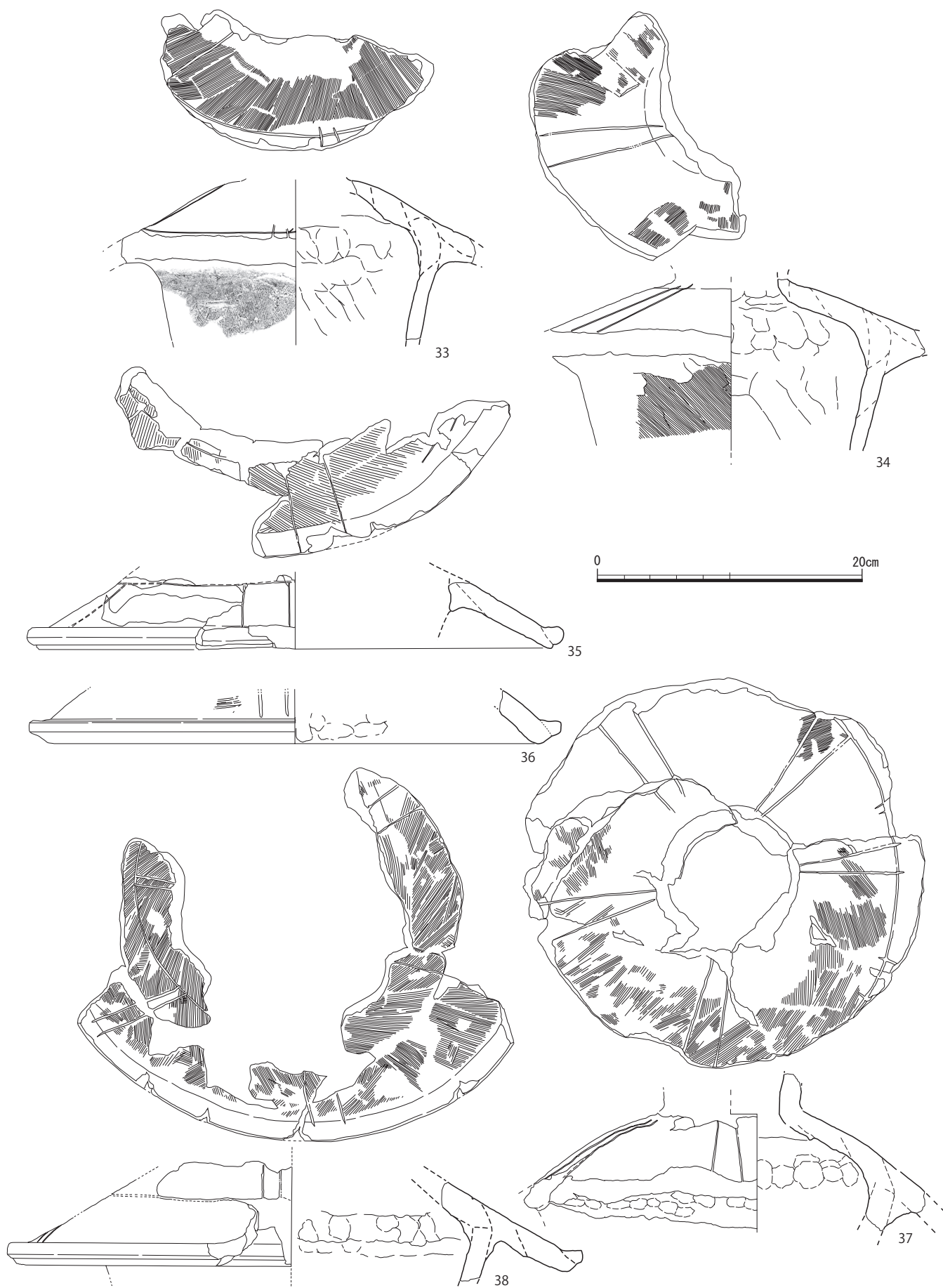
第 27 図 蓋形埴輪 5 (1/4)



第 28 図 蓋形埴輪 6 (1/4)



第 29 図 蓋形埴輪 7 (1/4)



第30図 蓋形埴輪 8 (1/4)

考えられる。

22・23 は笠部で、暗橙褐色～橙褐色を呈するが軟質の焼成である。22 は断面四角形の端部に低平な凸帯を貼り付けているものである。23 は端部の丸い笠部先端に断面台形の凸帯を貼り付けたものである。

24 は暗橙褐色～橙褐色を呈し、典型的な 2 類に類似した色調であるがやや軟質の焼成である。圏線の内周には放射状沈線が 5 対確認できるが、位置が偏っている。

25～27 は橙褐色～明褐色の色調であり、25 はやや軟質であるが 26 は堅緻であり、27 も笠部先端付近を除き堅緻な焼成である。27 は笠部内周の 80% 程度が復元できるが、圏線内に 5 対の放射状沈線が描かれていることが確認できる。

28～30 は橙褐色～明褐色の色調であり、堅緻に焼成されているもので、典型的な 2 類と共通する特徴を有するものである。28 は N 区で出土したもので、受け部、笠部外縁、台部下半を欠いている。笠部には圏線内に 5 対の放射状沈線が認められ、圏線外にも 4 対が残存しており、圏線内外に 5 対ずつ描かれていたと推定される。圏線内のハケメは、施された後にほとんどナデ消されており、その後に圏線、さらに放射状沈線が施文される。なお、かつて年報において報告した際²⁾に、円形透かしがあることを示す実測図を提示したが、全くの観察上の誤りであり、正式報告にあたり訂正しておきたい。29 は笠部外面が 5～6 本/cm の比較的粗いハケメで調整されており、20 と類似するものである。30 は笠部外面の圏線内に 3 対の放射状沈線が確認できるが、その位置は著しく偏っており、5 対でない可能性もある。調整・施文の順序は 28 と同じであるが、ハケメのナデ消しは一部にとどまる。

31・32 は笠部先端部である。32 は先端部が屈曲して稜をなしており、やや上向きに断面四角形の凸帯が貼り付けられている。

33・34 は色調が異なるものの胎土・焼成・調整が類似し、また近接して出土していることから同一個体の可能性が高い資料である。暗い淡赤褐色ないし淡赤褐色を呈し、34 はやや軟質な焼成である。

35 は 29 と接合しないが調整や胎土・焼成が類似するもので、同一個体の可能性があるものである。

37 は内面が暗赤橙褐色、外面が半分が暗赤橙褐色、半分が明褐色で漸移的に変化している。軟質な焼成である。受け部の立ち上がりまで残存しているが、先端部を欠いており、いずれのタイプか判断できない。笠部外面には偏りをもって施文された 5 対の放射状沈線が確認できる。受け部の接合部分が剥離して擬口縁になっている部分が見られる。

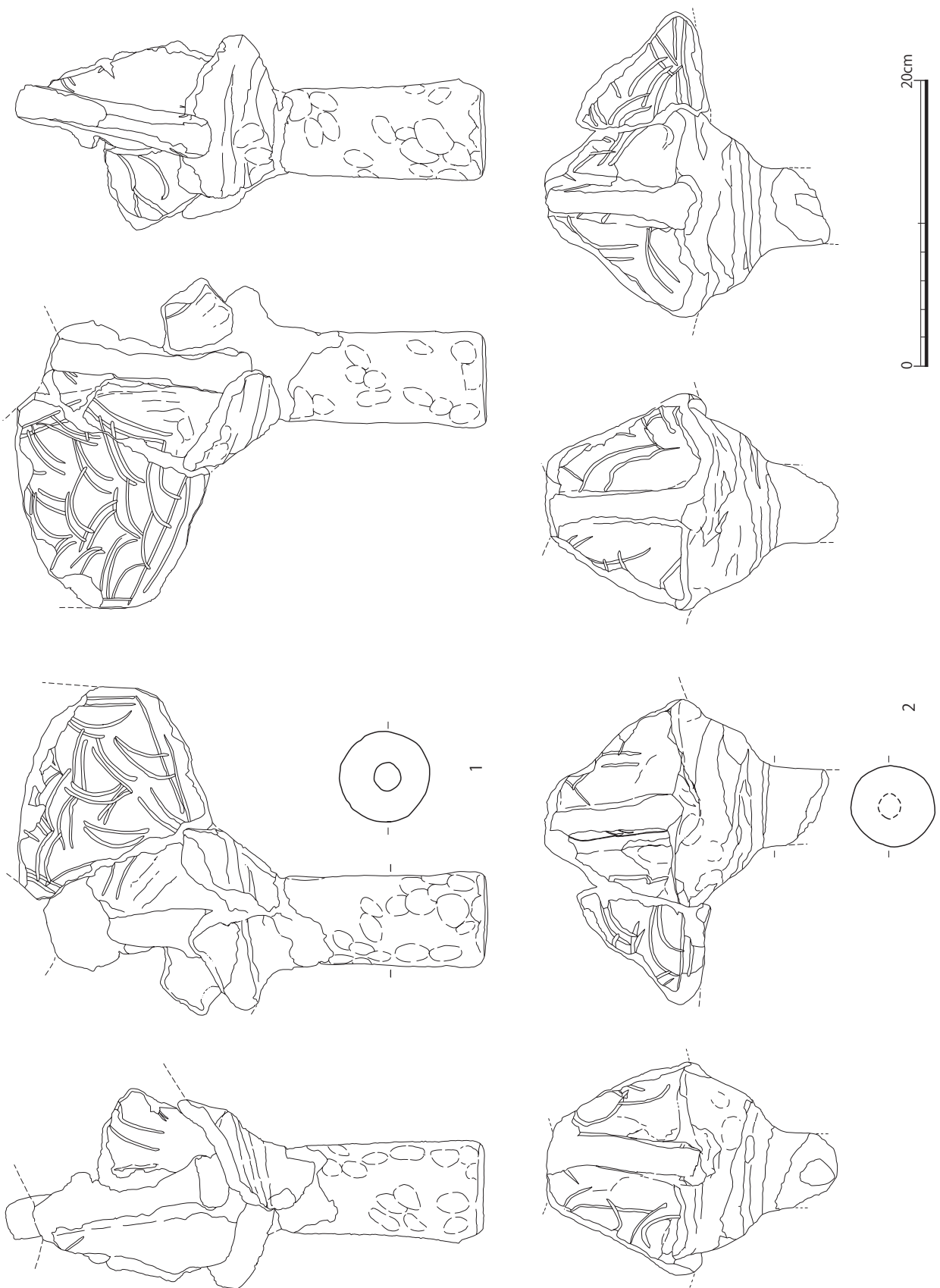
38 は、還元炎焼成により、灰褐色を呈し、きわめて堅緻に焼成されており、2 類の 11 に類似するものである。

立ち飾り（第 31 図～第 34 図）

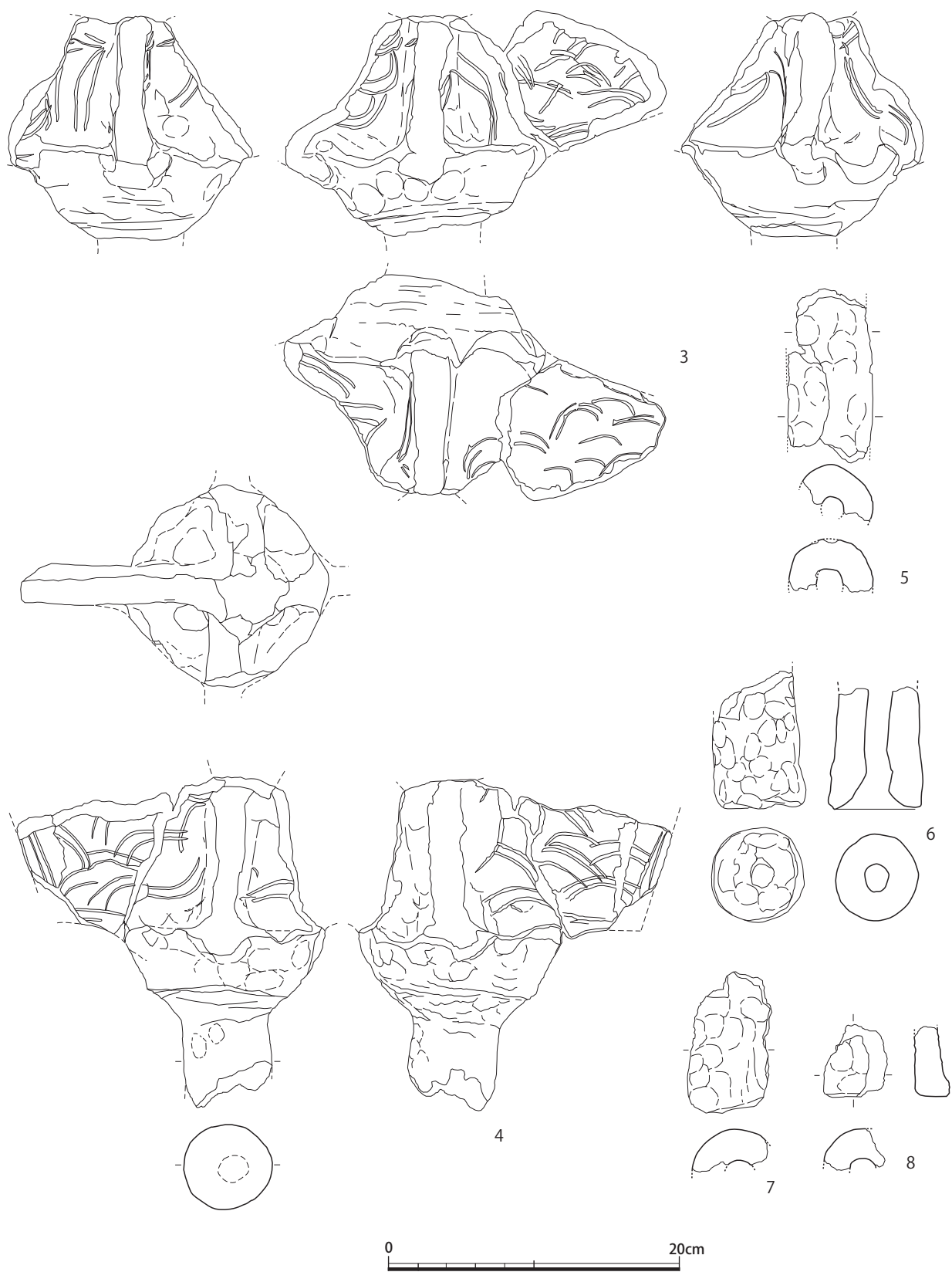
立ち飾りは基軸部が 4 個、接合しない軸部が 3 個確認できる（1～7）ことから、少なくとも 4 個体以上存在するとみられる。飾り板は 4 枚で厚さ 2 cm 程度であり、粘土板を切り出して成型した後、ハケ調整がなされた後で基軸部に接合されている。接合部付近の観察では、接合して調整を行った後に施文していることが確認されるため、文様の施文は接合後と判断される。ただし、接合前に施文していて、接合部付近のみ文様を描き足した可能性も考えられる。胎土は、大型の石英粒子を多く含む在地系のものであり、焼成は赤褐色系で、軟質なものが多い傾向にあり、蓋形埴輪 1 類と共通する。

軸部は直径 5～6 cm、表面には指オサエによる調整の痕跡が著しい。試掘調査の際に動物形埴輪の足ではないかとされていたもの（第 8 図 6）は第 31 図 1 の軸部であることが判明した。

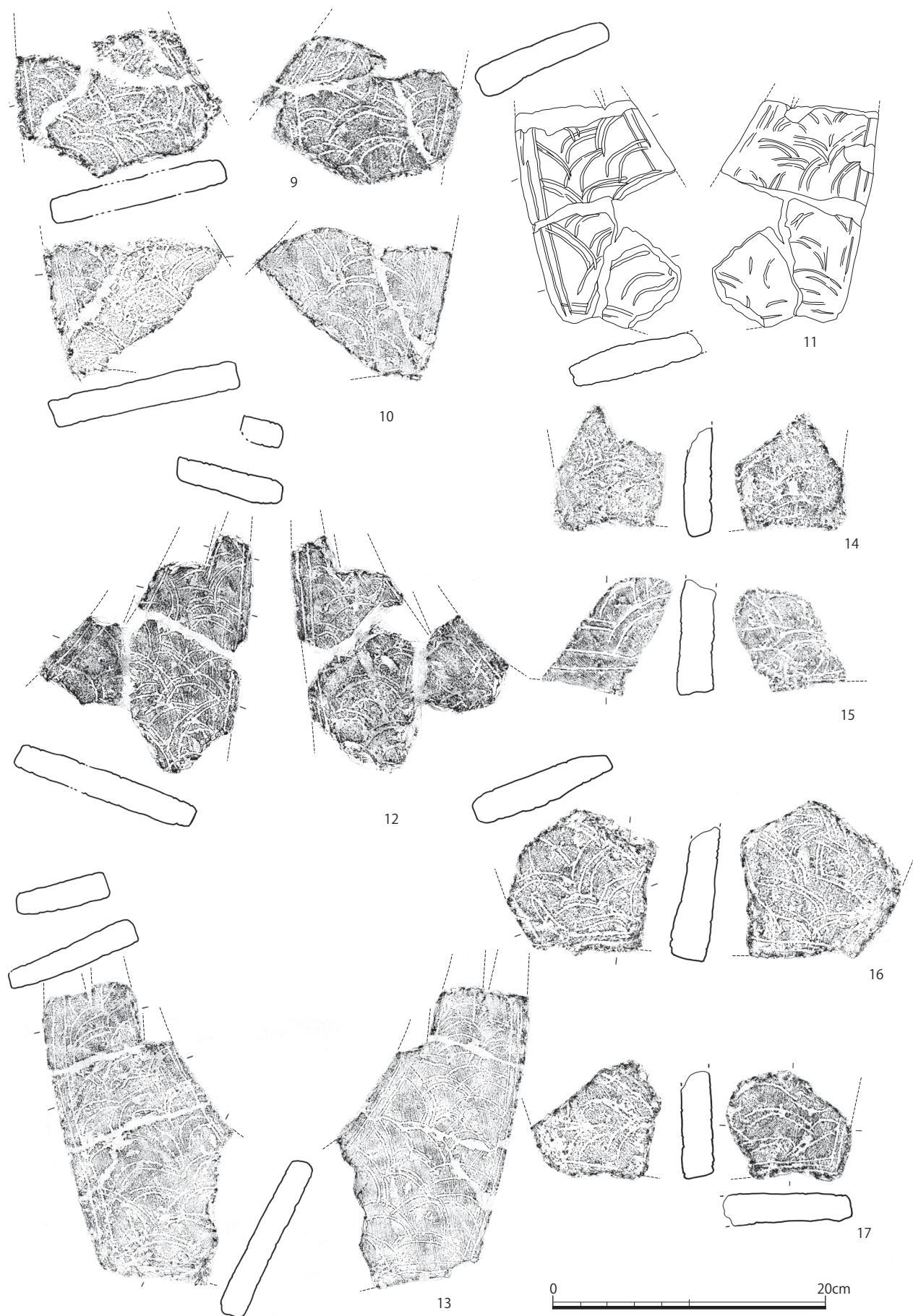
飾り板（9～32）は 9～10 本/cm の比較的細かなハケメによる調整の後、軸部に接合され、接合後にへら状工具により施文されている。文様は 2 本の平行線で外縁部の縁取りがされ、内部を概ね 2 本を 1 組とする連続する弧線を描いて充填している。飾り板は、直線的に鋭く立ち上がる形態を呈し、明確な鰭状の部分として認



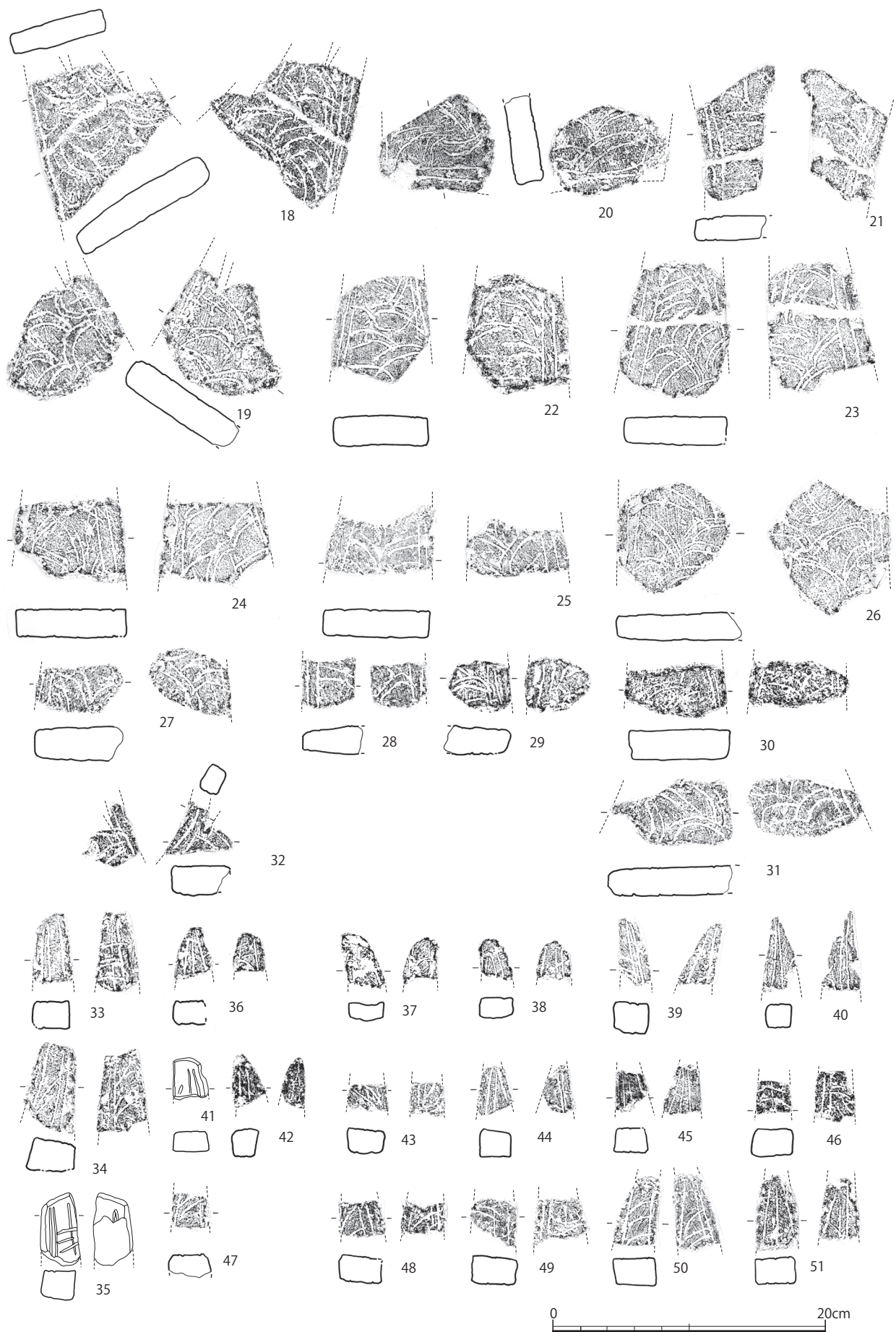
第31図 蓋形埴輪・立飾リ1 (1/4)



第 32 図 蓋形埴輪・立飾り 2 (1/4)

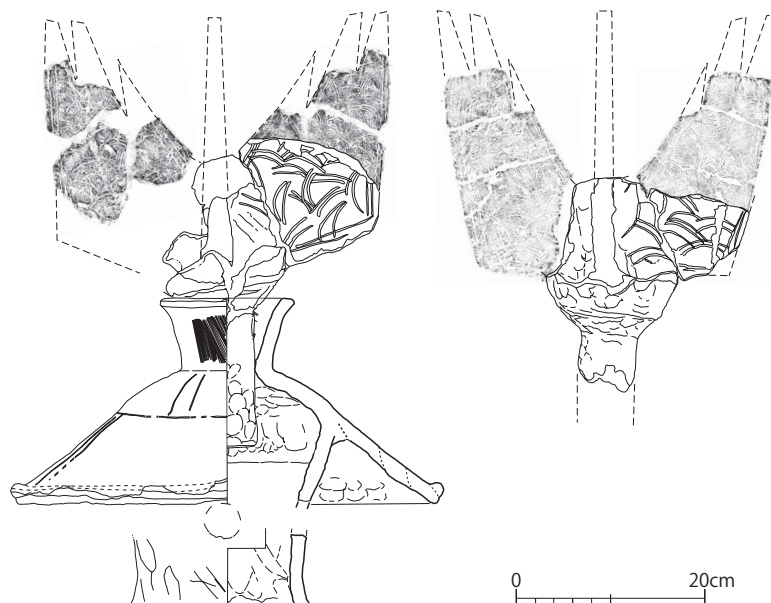


第33図 蓋形埴輪・立飾り3 (1/4)



第 34 図 蓋形埴輪・立飾リ 4 (1/4)

識できるものが無く、その代わりに先端部付近の内面側に1つ、さらに先端部に2つの突起がみられ、飾り板1枚につき合計3つの突起が形成されているようである。これらの突起は、鋭い工具により削り出されていることが観察される。11～13・18・32は飾り板のうち、こうした突起の基部を有するものである。このうち32は形状から、飾り板の先端部付近内面側に形成された突起部にあたると推測される。33～50は折損した突起部で、このうち33～42はその先端部分が残っているものである。幅広の33～35および41は、先端が斜めに削り落とされており、方形あるいは台形状を呈する。



第35図 蓋形埴輪・立飾り復元図(1/8)

飾り板12・13に残された突起基部幅との比較によれば、飾り板先端部につく突起と推測される。

立ち飾りの全形は、推測を交えざるを得ないが第35図のような形状に復元される。飾り板が細身のものとや幅広のものとがあると考えられる。

b. 家形埴輪(第35図～第37図)

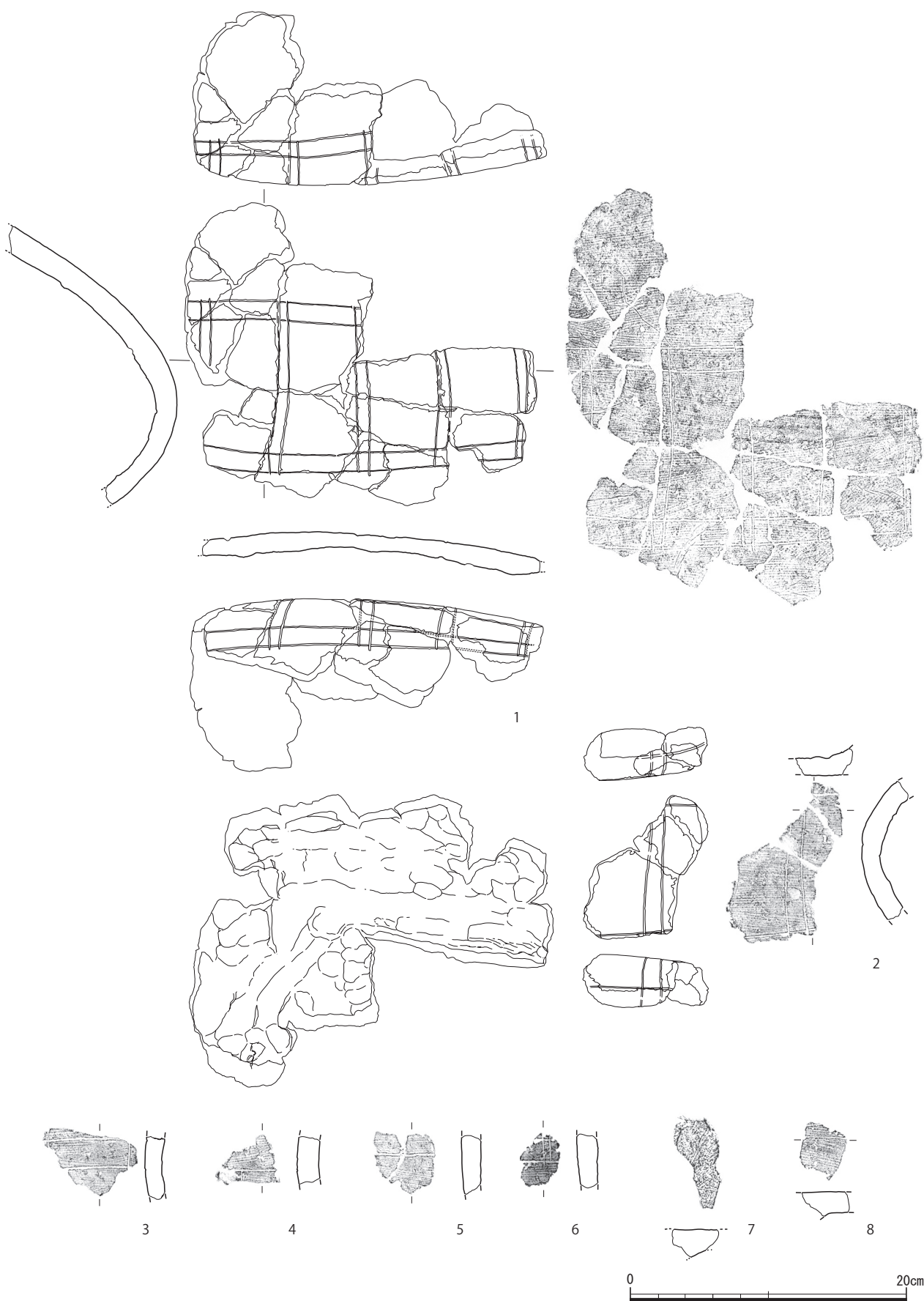
家形埴輪は切妻形の家を表現したもので、屋根部、破風板から壁部の破片資料が出土している。破片の多くは焼き締まった堅緻な焼成もしくは還元炎焼成であり、同一個体の可能性が考えられる。ただ1点(第37図12)のみは明らかに焼成が異なる資料であるため、2個体以上存在する可能性が考えられる。

1～8は屋根部である。接合作業の結果、1のように屋根の中央部分が接合した。押縁の表現は2条一組の沈線を桁行き方向に平行して描き、これと直交する梁行き方向に2条一組の平行沈線を描く。梁行き方向の平行沈線は1では5組認められるが、切妻部(9)と接合した部分にみられる1組とあわせ、6組以上おそらく7組描かれているとみられる。施文に先立って、屋根外面は5～6本/cm程度のハケメにより調整されている。屋根内面側は、指オサエと指ナデが著しい。胎土は石英粒を多く含む在地系のもので、焼成は内面側は明褐色でやや軟質であるが、外面は非常に堅く焼き締まり、明褐色から灰褐色を呈する。

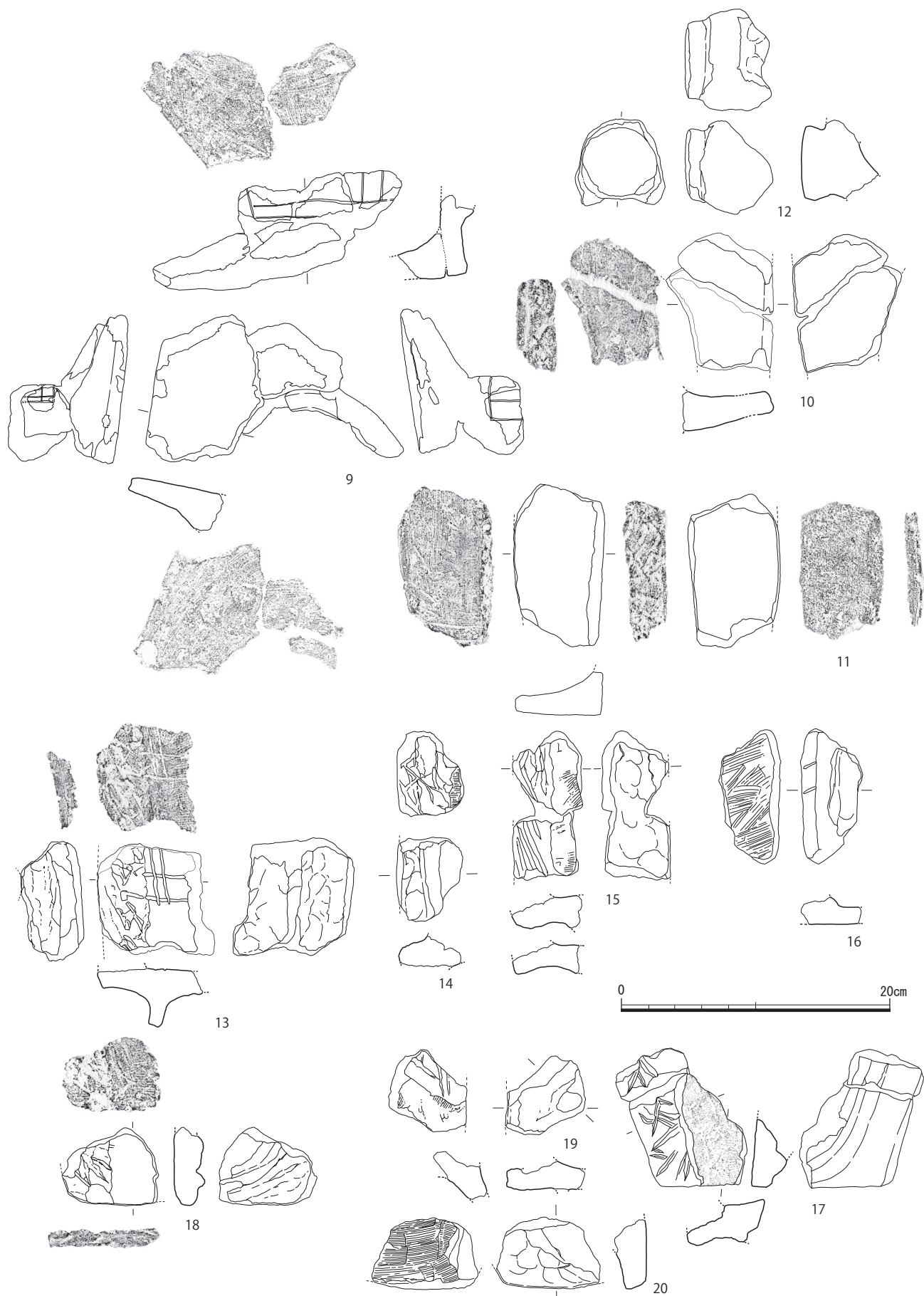
9は屋根端部から破風板にかけて接合した資料である。破風板外面は9～10本/cmの比較的細かいハケメにより調整される。屋根側の接合部にあらかじめ沈線を施して接合しやすくしている。10・11は破風板である。12は切妻形の家の棟木を表現したものである。他の家形埴輪資料と異なり、赤褐色で軟質な焼成であるため、別個体の家形埴輪と推定される。

13～19は屋根の端部もしくは端部付近の資料である。13は屋根の上部にあたる部分で破風板の接合部が認められる。また、切妻の壁側もわずかに残存しているが、透かしとみられる円形の切り込みが観察される。14・15は屋根端部で、破風板の接合部がみられる。14は切妻部の壁がわずかに残る。16は屋根端部ではないが端部に近い部位である。裏面には壁との接合部が観察される。17・18・20は屋根の下隅部と思われる。表面側には破風板の接合痕がみられ、裏面には壁面との接合部が認められる。19は屋根の下隅にごく近い部位である。

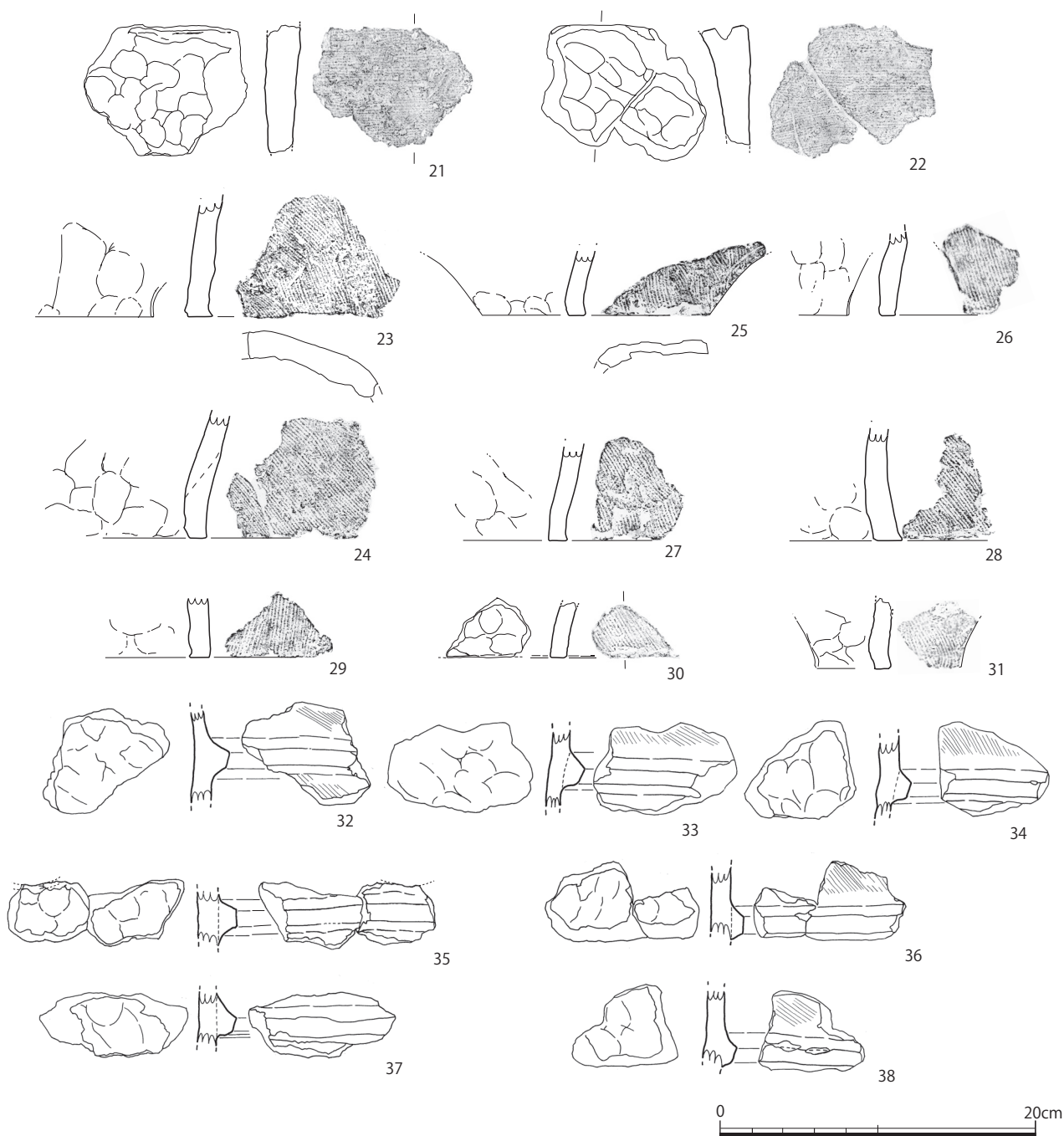
21・22は家の壁面で、22には屋根との接合部が残っている。外面は屋根と同じく5～6本/cm程度のハケメにより調整されている。



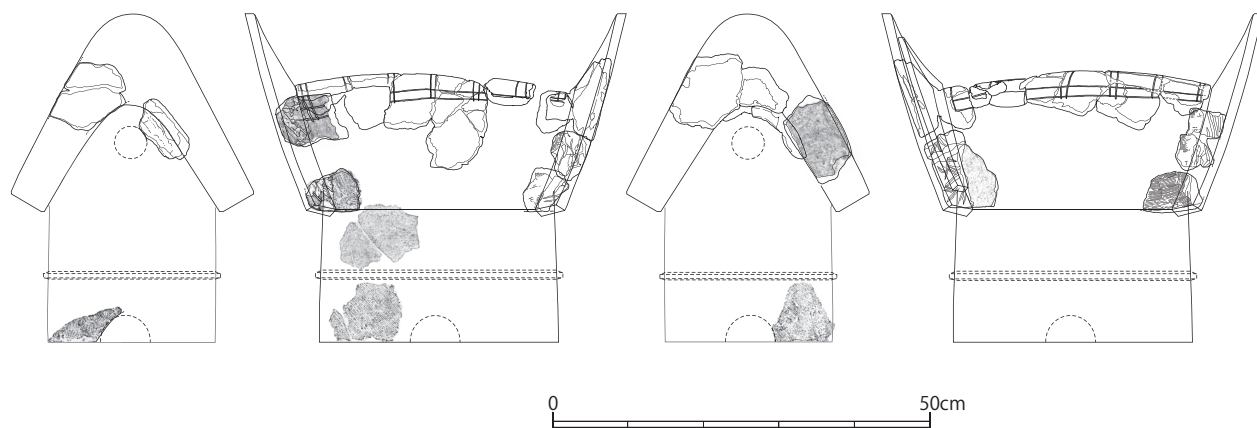
第 36 図 家形埴輪 1 (1/4)



第 37 図 家形埴輪 2 (1/4)



第 38 図 家形埴輪 3 (1/4)



第 39 図 家形埴輪復元図 (1/10)

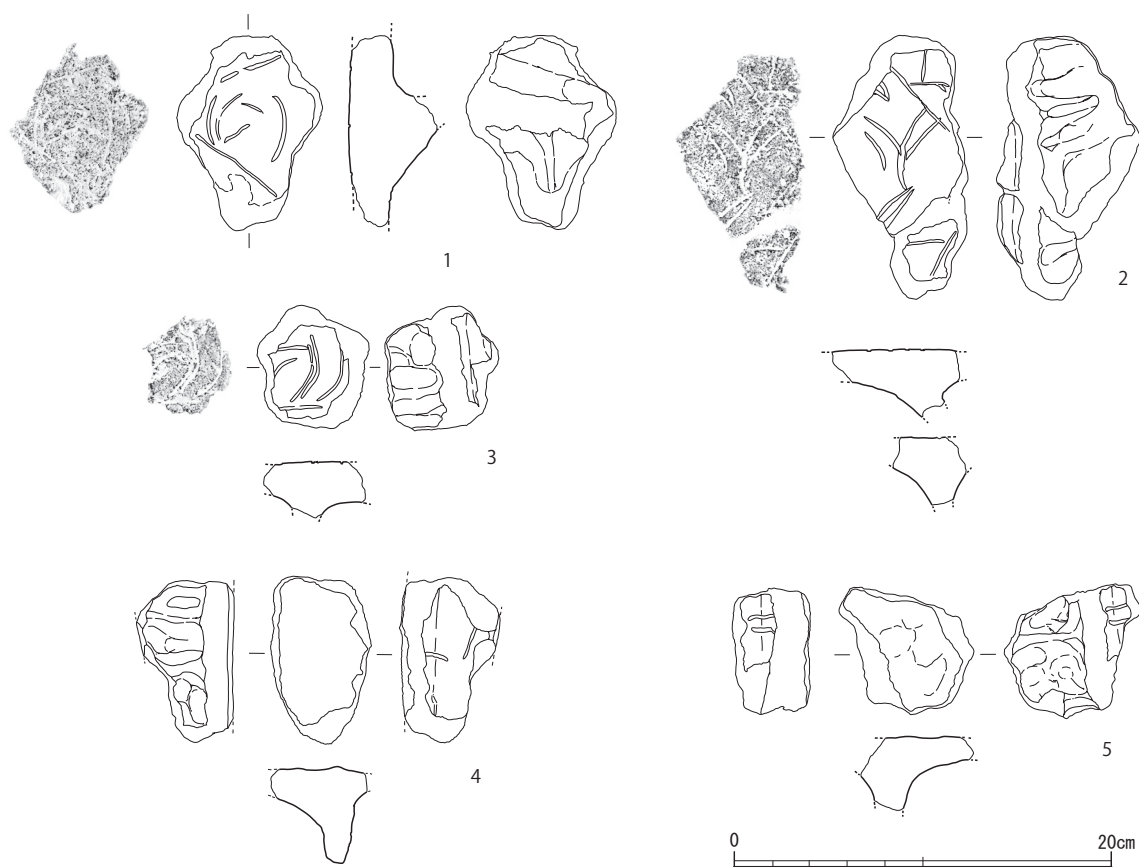
23～31は底部である。23～26、31には半円形状と推定される袢りが切り込まれている。いずれも外面は屋根と同じく5～6本/cm程度ハケメにより調整されている。

32～38は、壁面と底部の間にある凸帯と考えられるものである。円筒埴輪の胴部凸帯とも考えられるが、他の円筒埴輪の凸帯がいずれもこれらより明らかに低平であること、器面のカーブが非常に緩い、あるいはほとんど平坦であること、出土地点が他の家形埴輪の資料が出土した地点と同じC・D区および試掘12Tに限られていること、ハケメが確認できるものでは、5～6本/cm程度ハケメであり家形埴輪と共通すること、焼成がいずれも堅緻で、還元炎焼成によるものもあること等から、家形埴輪と同一個体でその一部をなすものである可能性が高いと判断した。35には透かしのように切り抜かれた部分が認められるが、残存部分がわずかであるため、どのような形状に切り抜かれていたかは判断できない。

12を除く家形埴輪資料は1個体の可能性があるが、推測を交えて復元したものが第39図である。破風板を含む屋根の最大長は約50cm程度と推定され、壁には凸帯が巡らされていると推定される。底部破片に凸帯の痕跡を有するものがみられないことから、凸帯は底面から8cm以上上にあると推測され、この推測に基づく復元である。凸帯資料の中には、凸帯に接する部位に切り抜かれた部分を有するものがある(第38図35)ことから、これが家形埴輪の一部であるとすれば、壁面に窓もしくは入り口の表現があった可能性がある。

c. 靴形埴輪？(第39図)

第39図1～5は、蓋形埴輪の立ち飾りと同様な、不整形な弧線を連続して描く文様を持つものであるが、立ち飾りとは器形が明らかに異なっており、別の器材埴輪の一部と考えられるものである。非常に退化しているが、靴の可能性が高いと考えられる。胎土、焼成は蓋形埴輪の立ち飾りと類似し、赤褐色を呈し、軟質の焼成である。



第40図 靴形埴輪？(1/4)